

考古學年報

第一輯  
昭和六年度



始





14.5  
307

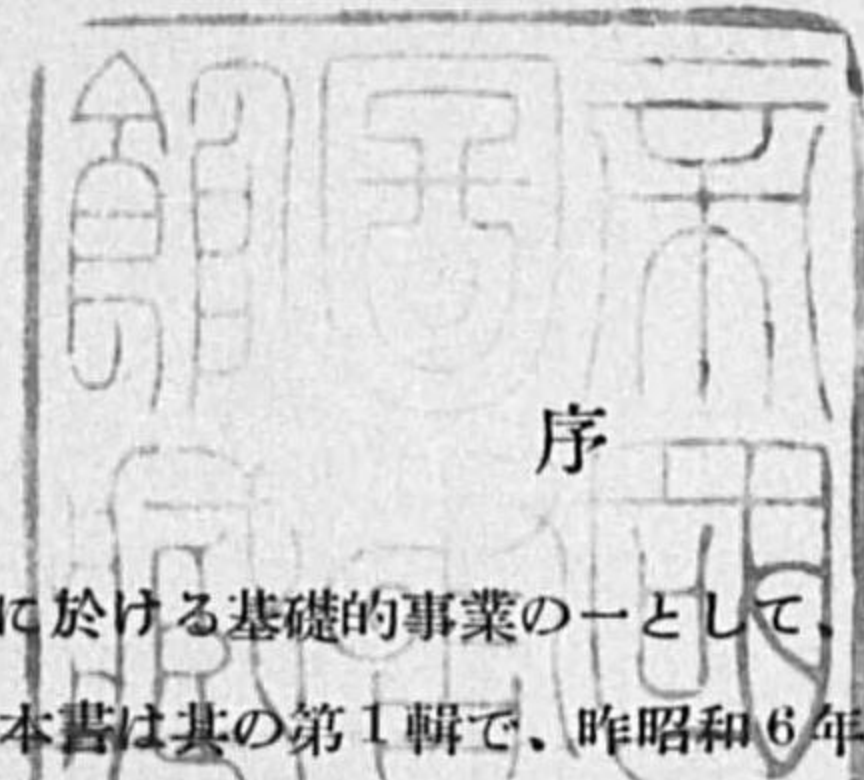
考古學年報

第一輯

昭和六年度

東京考古學會





序

考古學年報は、考古學に於ける基礎的事業の一として、一年間の研究結果を整頓する目的で編纂されるものである。本書は其の第1輯で、昨昭和6年1月から12月までを取扱つた昭和6年度分である。以下年毎に本年報を出版したい。考古學年報編纂の希望は、編者の巴里滞在中に生じ、本年3月歸朝と共に、關係文献の資料蒐集に着手したのである。不在中の出来事を後から追求することは、資料の搜索を自から局限することであつた。従つて本輯に掲げたものは主要文献及び編者等の偶然披見し得たものに相當する。但し脱落した資料に就ては、第2輯で追補したい考を有つてゐる。本書編纂上、編者は公私の便宜を受けた。内務省神社局考證課・文部省宗教局史蹟調査課・東大理學部人類學教室・東京文理科大學史學研究室・早稻田大學圖書館及び柴田常惠・西村眞次・上田三平・田澤金吾・大場磐雄・八幡一郎・赤堀英三・直良信夫・小林行雄・弘津史文・木代修一・岩澤正作・仁科義男・西郷藤八氏等に對し感謝する次第である。又文献の資料蒐集に就ては會員淺田芳郎氏の援助を受けた。本書の文献目録は其の蒐集の結果を、幾分整頓したものである。併せて深く謝意を表す。尙第2輯は來年初夏に刊行したい。諸地方發行の文献は殊に編者にとつて見る機會の尠いものであらう。幸に資料の報告を同學の士より賜らむことを望むものである。

昭和7年7月

森本六爾





14.5-307

## 目 次

### 序

考古學文獻總目錄	1
凡 例	2
書名略稱表	3
A 考古學一般・理論文獻	4
B 日本內地考古學文獻	5
繩文式時代關係	5
彌生式時代關係	8
祝部式時代關係	10
祝部式時代以後	14
雜	15
C 日本內地歷史考古學的文獻	17
D 日本內地以外考古學文獻	21
北海道方面	21
琉球臺灣方面	21
朝鮮方面	21
滿洲支那方面	22
印度支那印度方面	23
其他方面	24
地域別索引(日本內地考古學文獻)	25
筆者別索引(考古學文獻總目錄)	26



考古學主要論文梗概並批評 .....	30
考古學界動向回顧 .....	47
繩文式時代關係 .....	49
彌生式時代關係 .....	50
祝部式時代關係 .....	51
日本內地諸問題關係 .....	52
滿洲及支那其他關係 .....	53
發掘及發見關係 .....	54
研究所及學會關係 .....	55
附    錄	
本輯資料蒐集雜誌一覽表 .....	59
考古學主要雜誌解題 .....	62
文獻追加及批評書込欄 .....	65

## 考古學文獻總目錄

昭和六年度



凡 例

1. 本目録関係文献の資料蒐集に就ては浅田芳郎氏の努力に負ふ處が多であつた。編者は之を整頓し、幾分追補を試みたに過ぎない。
2. 各府縣發行の報告書類は一般賣品でない爲、見る機會が尠い。最も多く集められて居るべき筈の文部省宗教局保存課備付のものをどうて此處に掲げ得たが、同課にないものもあつて甚だ不便である。其等に就ては、他日の追補を試みる機會があらう。
3. 掲載文献は、先づ是を日本内地と内地以外とに大別し、日本内地に就ては、繩文式・彌生式・祝部式の時代別に配し、併せて歴史考古學的研究をも加へた。
4. 時代別目録に於ては更に大體件別・地域別にしたが、甚しく窮屈な細別を取て行はないことにした。地域の配列は西から東の順序により、又行を明けることによつて件別を示さうとした編者の意を汲まれれば幸である。
5. 一般文献中、書名直後の數字の項は何巻何號を示し、其後にある數字は頁數を示すものである。單とあるは單行書の意である。月は刊行月を表す。
6. 本目録中には書名を略稱によつて表したのものがある。次項の略稱表を参照されたい。是は略稱によつて本名を引き出す爲の索引表である。
7. 地域別索引は文献總目録中のB日本内地考古學文献についてのみ試み、編者の意圖する「府縣別考古學叢書」中の文献索引に寄與せむと欲するために設けた。番號は目録に採擇した文献番號を示す。
8. 筆者別索引は總目録全體に就て行つた。番號は地域別の索引の場合と同様の意味をもつ。筆者名解讀不明瞭のものを讀不詳として一括した。



ア 行

愛知縣報 愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告  
 秋田會誌 秋田考古會會誌(雜誌)  
 圓城寺 圓城寺之研究  
 大分縣報 大分縣史蹟名勝天然紀念物調査報告  
 大阪府報 大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告

カ 行

郷土講座 郷土史研究講座  
 京都府報 京都府史蹟名勝地調査報告  
 桑原論叢 桑原博士還曆記念東洋史論叢  
 啓明講演 財團法人啓明會講演集  
 考古學雜 考古學雜誌(雜誌)  
 國家成立 日本國家の成立過程  
 國史回顧 國史回顧會紀要

サ 行

滋賀縣報 滋賀縣史蹟調査報告  
 史前雜誌 史前學雜誌(誌雜)  
 史蹟名勝 史蹟名勝天然紀念物  
 史と美 史述と美術(雜誌)  
 信濃會誌 信濃考古學會誌(雜誌)  
 神道學雜 神道學雜誌(雜誌)  
 人類學雜 人類學雜誌(雜誌)

タ 行

千葉縣報 千葉縣史蹟名勝天然紀念物調査報告  
 地理大系 日本地理風俗大系  
 知友新稿 蘇峰先生古稀祝賀知友新稿  
 圖録大成 日本考古圖録大成  
 帝室講演 帝室博物館講演集  
 遠江會誌 遠江郷土會誌(雜誌)  
 富山縣報 富山縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

ナ 行

直良所報 直良石器時代文化研究所所報  
 長野縣報 長野縣史蹟名勝天然紀念物調査報告  
 日佛學報 日佛會館學報

ハ 行

播磨資料 播磨文化資料(雜誌)  
 文化叢考 日本文化叢考

マ 行

宮城縣報 宮城縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

ヤ 行

山梨縣報 山梨縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

ウ 行

歴と地 歴史と地理(雜誌)



A

考古學一般・理論文献

(含補助學)

1	先史考古學に於ける分類	八幡一郎	9月	人類學雜	46-9	330-333
2	土器石器の分類に就て	山村青作	12月	考古學	2-5.6	180-182
3	有史前の遺物と其整理法	西村眞次	2月	科學畫報	16-2	283-300
4	遺蹟の景觀とその形態	中川徳治	7月	上代文化	6	15-20
5	土器成形上に於ける轆轤の意義	島田貞彦	6月	考古學雜	21-6	381-397
6	空からの考古學	森本六爾	4月	考古學	2-2	1-14
7	空からの考古學	森本六爾	5月	讀賣新聞		
8	空からの考古學	森本六爾	11月	武藏野	17-2	5-7
9	飛行機と日本考古學	森本六爾	4月	考古學	2-2	15-34
10	考古學的航空寫眞	クニタニフミ子著 森本六爾譯	4月	考古學	2-2	35-55
11	飛行機と考古學	森本六爾	4月	單行本四六倍版		本文55 圖版19
12	飛行機と考古學	有吉憲彰	11月	福岡	53	2-4
13	人類と文化	ウキツスラ著 赤堀英三譯	2月	單行本菊版		本文354
14	文化人類學の環境的視角	松村武雄	1月	人類學雜	46-1	1-26
15	エリオット・スミス博士による初期文化の移動に就て	丸茂武重	7月	上代文化	6	27-35
16	史前學と我神代	大山柏	1月	史前雜誌	3-1	1-5
17	日本史前學の前途	大山柏	11月	知友新稿(單)		351-357
18	先史地理學研究に就ての二三の考へ	小牧實繁	3月	歴と地	27-3	408-417
19	山城幡枝の土器	島田貞彦	3月	考古學雜	21-3	188-204
20	原始神道の考古學的考察(3)	大場磐雄	12月	神道講座(單)	6	33-44

B

日本内地考古學文献

縄文式時代關係

21	Notions d'Archéologie Japonaise	Haguenuer	6月	日佛學報(單)	3-1.2	1-74
22	土中の文化	大野雲外	8月	單行本四六版		本文445
23	貝塚鑽談(一)	甲野勇	12月	史前雜誌	3-5	242-244
24	大分縣西國東郡河内村森貝塚の研究	樋口清之	1月	史前雜誌	3-1	13-50
25	山之口原始時代住居址	河井田政吉	5月	史蹟名勝	6-5	420-421
26	遠州の石器時代遺蹟	鈴木覺馬	1月	嶽南史(單)	1	14
27	榛原郡石器時代遺物一覽表	山崎山 高松	2月	遠江會誌	1	17-30
28	小笠郡石器時代遺物一覽表	村松精二 他四名	4月	遠江會誌	2	27-42
29	周智郡石器時代遺物一覽表	村松精二	6月	遠江會誌	3	13-20
30	静岡市先史時代の遺蹟		6月	静岡市史(單)	1	17-30
31	静岡市及附近の遺物		6月	静岡市史(單)	1	64-70
32	北安曇郡に於ける先史時代遺物の分布	江口善次	1月	信濃會誌	2-5.6	131-145
33	北安曇郡北城村船山遺跡	今井眞樹	3月	長野縣報(單)	6	15-29
34	諏訪郡尖石遺蹟の發掘に就て	今井弘樹	1月	信濃會誌	2-5.6	146-164
35	大原村及七保村先史時代遺蹟並遺物	仁科義男	5月	山梨縣報(單)	5	1-30
36	日野春村先史時代遺蹟並遺物	仁科義男	5月	山梨縣報(單)	5	31-51
37	甲斐先史考古學資料	仁科義男	6月	考古學	2-3	47-48
38	甲斐國穗坂村先史時代の調査	仁科義男	11月	史蹟名勝	6-11	915-940
39	神奈川縣帷子川上流の先史遺蹟	鈴木一	2月	上代文化	4.5	59-64
40	相模國谷ヶ原石器時代住居址群	石野瑛	10月	史蹟名勝	6-10	796-815
41	横濱市神奈川區篠原貝塚調査小報	松下胤信	12月	史前雜誌	3-5	245-248
42	高麗村に再び發見された石器時代住居址	加藤喜代次郎	1月	埼玉史談	2-3	192-194



考古學文献總目錄

43	世界貝塚史上より見たる大森貝塚	鳥居龍藏	11月	知友新稿(單)	374—393
44	東京府下上荻窪中田の石器時代遺蹟	植松考穆	1月	日本研究	3 57—82
45	武藏國野川石器時代遺蹟出土の遺物	池上啓介	9月	史前雜誌	3—4 188—191
46	東京府下池上町久ヶ原庄仙出土の石器時代遺物	齋藤房太郎	9月	人類學雜	46—9 324—330
47	武藏國折木貝塚に石器時代堅穴發見	八幡一郎	11月	人類學雜	46—11 764—765
48	武藏野研究の資料一つ一つ	黒田善次	6月 11月 12月	武藏野	17— $\frac{1}{3}$ $\frac{31-33}{17-29}$ $\frac{48-51}{48-51}$
49	山口村よりアイヌ式發見		3月	埼玉史境	2—4 302
50	上總國小櫃川流域に於ける石器時代遺蹟に就て	横山將三郎	1月	史蹟名勝	6—1 14—29
51	下總香取郡神里村の貝塚	大山柏	12月	史前雜誌	3—5 225—229
52	常陸國麻生大宮臺貝塚調査報告	池上啓介	9月	史前雜誌	3—4 159—172
53	縣内を鳥瞰して石器時代遺蹟の推想	岩澤正作	1月	上毛	165 23—25
54	岩手二戸郡一戸町石器時代遺蹟に就て	菊池山哉	5月	人類學雜	46—5 201—206
55	羽前高森の先史遺物	神林淳雄	7月	上代文化	6 53—54
56	鹿角郡大湯町に於ける遺蹟の研究	武藤一郎	12月	秋田會誌	3—5 44—55
57	津雲貝塚の貝の比較	佐藤清明	8月	吉備考古	10 12
58	但馬國城崎郡新田村中谷貝塚の貝類	直良信夫	9月	史前雜誌	3—4 207—208
59	白井貝塚採集の貝類	大山柏	12月	史前雜誌	3—5 256—257
60	木内明神貝塚採集の貝類	大山柏	12月	史前雜誌	3—5 257
61	我國石器時代人の食料	池上啓介	11月	史觀	1 122—148
62	繩文土器	杉山壽榮男	12月	圖録大成(單)	14 圖版48
63	土器の民族的時空的相異(下)	石野瑛	6月	考古學	2—3 50—53
64	關東に於ける奥羽薄手式土器(上)	大場磐雄	12月	史前雜誌	3—5 219—224
65	原始工藝と郷土文化	杉山壽榮男	10月	郷土講座(單)	2 1—83
66	先史時代土器文様と厚朴及柏に就て	仁科義男	1月 2月	山梨教育	395 2—5 396 2—4

考古學文献總目錄

67	肥後發見の一土器	八幡一郎	10月	人類學雜	46—10 705—706
68	三河國幡豆郡西尾貝塚發見の注口土器に就て	吉田富夫	4月	考古學雜	21—4 295—298
69	飛騨國初發見の土偶と注口式土器に就て	笠原烏丸	8月	考古學雜	21—8 586—591
70	吾妻郡より發見の土偶に就て	金澤佐平	7月	上毛	171 3—4
71	石器時代の土製猿	八幡一郎	1月	人類學雜	46—1 29—34
72	羽前國出土の一土偶	樋口清之	12月	史前雜誌	3—5 253
73	完全に近き諸磯式土器	八幡一郎	3月	人類學雜	46—3 112—113
74	武藏眞福寺の三土器	八幡一郎	4月	人類學雜	46—4 150—151
75	繩文ある土器片中根君郎		9月	史前雜誌	3—4 205—206
76	磨製石斧の型態と石質との關係に就て	赤堀英三	3月	人類學雜	46—3 81—89
77	磨製石斧の石質に就て	八幡一郎	5月	人類學雜	46—5 198—200
78	打製石鏃の地域的差異	赤堀英三	5月	人類學雜	46—5 166—180
79	遺蹟の分布と遺物の關係 <small>1 關石の場合 2 石冠の場合</small>	赤堀英三 忽那將愛	11月	人類學雜	46—11 759—761
80	北安曇郡小谷發見石器	八幡一郎	1月	信濃會誌	2—5,6 165—167
81	武藏國都筑郡折本發見の磨石斧	齋藤房太郎	1月	史前雜誌	3—1 57
82	石彈子か	八幡一郎	1月	人類學雜	46—1 33—34
83	眞福寺出土の裝飾品	八幡一郎	2月	人類學雜	46—2 69
84	石器時代勾玉の研究	兩角守一	6月 12月	考古學	2—3 37—46 2—5,6 169—176
85	松田蟻氏寄贈の石製裝飾品	甲野勇	1月	史前雜誌	3—1 57
86	羽後國石器時代出土の木製品	武藤鐵城	9月	史前雜誌	3—4 204—205
87	先史時代の交通	上田三平	4月	歴史地理	57—4 316—321



彌生式時代關係

88	筑前國藤崎に於ける彌生式遺蹟	永倉松男 鏡山 猛	2月	考古學	2-1	35-44
89	大宰府附近に於ける彌生式系統遺蹟調査(7)	中山平次郎	3月	考古學雜	21-3	205-211
90	耶馬臺國及び双國に關して	中山平次郎	5月 6月	考古學雜	21-5 21-6	311-336 338-403
91	有史以前の千代の松原	植村恒三郎	6月	都久志	1	1-4
92	博多灣出土遺物と元寇役への新資料	山本 博	11月	都久志	3	11-17
93	土佐龍河石灰洞古代穴居遺蹟發見	寺石正路	11月	史蹟名勝	6-11	941-951
94	伊豫國に於ける新發見の石器時代遺物	樋口清之	12月	史前雜誌	3-5	253-254
95	播磨國溝口彌生式遺蹟調査豫報	島田清郎 淺田 芳	12月	考古學	2-5,6	182-184
96	淡路國吹上海岸の砂丘地帯遺蹟と遺物	直良信夫	9月	史前雜誌	3-4	206-207
97	大阪市東成區森小路發見の彌生式遺蹟に就て	島田貞彦 有光 敦一	10月	考古學雜	21-10	707-725
98	大和二上石器製造遺蹟研究	樋口清之	2月	上代文化	4,5	27-42
99	上代から見た丹波市の遺蹟遺物	乾 健治	10月	考古叢書	1	10-14
100	和歌山縣石器時代遺物發見地名表	藤井誠一	9月	史前雜誌	3-4	204
101	先志摩アズリ貝塚豫報	中川徳治	7月	上代文化	6	53
102	尾張國知多郡篠島の遺蹟	林 魁一	8月	人類學雜	46-8	304-305
103	名古屋市北部沖積層に於ける遺物包含地	小栗鐵次郎	3月	愛知縣報(單)	9	75-80
104	小笠郡西山口村宮脇河原遺蹟調査書	中川徳治	2月	遠江會誌	1	33-38
105	相模國鎌倉郡川上村の彌生式遺物	鈴木 一	7月	上代文化	6	56
106	考古二件 <small>1 石鏃を出した原史時代遺蹟 2 和歌山縣穴群</small>	赤星直忠	2月	考古學雜	21-2	159-162
107	石器を伴ふ彌生式遺蹟	八幡一郎	6月	考古學	2-3	20-27
108	池上町久ヶ原の彌生式堅穴に就て	片倉信光	7月	上代文化	6	35-52
109	東京市麻布仙臺山出土の彌生式遺物	齋藤房太郎	9月	史前雜誌	3-4	207
110	陸前國鹽釜港宇崎山園洞窟の石器及古墳時代遺蹟略報	永澤讓次	1月	史前雜誌	3-1	6-17
111	雜餉隈附近に發見せる石蓋土壙と無蓋土壙 <small>— 原始的墳墓の研究 —</small>	中山平次郎	9月	考古學雜	21-9	611-630

112	北九州石蓋式土壙に關する一資料	森 貞次郎	12月	史前雜誌	3-5	254-255
113	北九州二三遺蹟の甕棺出土人骨及銅鏡	永澤讓次	7月	人類學雜	46-7	249-261
114	筑前國東山村甕棺出土の鏡片に就て	梅原末治	9月	人類學雜	46-9	333-334
115	甕棺内新出の玉類及び布片等に就て <small>— 肥前國高來郡三會村遺蹟 —</small>	島田貞彦	8月	考古學雜	21-8	541-556
116	尾張馬見塚甕棺群の真相(2)	森 徳一郎	7月	史蹟名勝	6-7	552-563
117	彌生式土器の布目	八幡一郎	9月	人類學雜	46-9	334
118	彌生式土器に於ける七寶繫狀紋様に就て	直良信夫	11月	考古學雜	21-11	775-789
119	彌生式土器に於ける櫛目式文様の研究(2)	小林行雄	12月	考古學	2-5,6	137-147
120	豊前發見の一彌生式土器片について	森 貞次郎	7月	上代文化	6	54-55
121	道上村出土の彌生式插針と海藏寺址の古瓦と心礎	西村眞次	2月	備後史壇	7-2	1-2
122	高市郡畝傍町丈六の土器に就て	島本 一	6月	考古雜筆	5	1-3
123	大和高市郡鴨公村發見の彌生式土器	島本 一	8月	考古學雜	21-8	572-575
124	新澤村一出土土器	小林行雄	10月	考古叢書	1	41-42
125	由比濱採出の一彌生式土器	松下胤信	5月	考古學雜	21-5	364-367
126	東京府荏原郡東調布町嶺千鳥九保發見の彌生式土器	中根君郎	2月	人類學雜	46-2	61-65
127	彌生式遺蹟發見の土製勾玉	藤森榮一	2月	考古學	2-1	47-48
128	大和發見の所謂紡錘車に就て	下村正信	10月	考古叢書	1	19-21
129	再び古代くど石に就て	山口麻太郎	7月	族と傳説	4-7	703-4
130	大和畝傍町發見の石鏃に就て	島本 一	8月	考古雜筆	7	1-6
131	大和發見の所謂石匙に就て	下村正信	10月	考古叢書	1	6-9
132	所謂有角石器餘韻	服部清五郎	9月	史前雜誌	3-4	134-138



考古學文献總目錄

133	日本に於ける青銅器文化の傳播	森本六爾	12月	考古學	2-5.6	148-161
134	尾三に於ける青銅文化	小栗鐵次郎	11月	愛知教育	527	25-33
135	青銅器の製作過程を示す遺物	森本六爾	2月	上代文化	4.5	14-19
136	多鈕細文鏡の發見と研究史 <small>—日本青銅器時代學史の一編—</small>	森本六爾	6月	考古學	2-3	1-8
137	筑前國井原發見鏡片の複原	梅原末治	7月	史林	16-3	360-389
138	廣鋒銅鉞鏃范	森本六爾	2月	考古學	2-1	54
139	豊後に於ける青銅器關係の新資料	伊東東	2月	考古學	2-1	48-49
140	平形銅劍考	森本六爾	5月	歴と地	27-5	549-558
141	佐用郡平松銅劍に就て	永倉松男	2月	播磨資料	2	1-4
142	東春日井郡志段味村大字上志段味銅劍出土遺蹟	小栗鐵次郎	3月	愛知縣報(單)	9	80-86
143	尾張國東春日井郡志段味出土の細形銅劍	島田貞彦	2月	考古學雜	21-2	142-148
144	銅鐸時代と遠州の銅鐸	鈴木覺馬	1月	嶽南史(單)	1	15-16
145	日本海々岸に於ける石器伴出銅鐵の研究	直良信夫	6月	直良所報(單)	6	1-18
146	銅鐵を出したる名古屋西志賀具塚	小栗鐵次郎	3月	愛知縣報(單)	9	70-75
147	石金伴用期遺蹟發見の鐵鐵に就て	直良信夫	2月 3月	歴と地	27-2 3	265-274 368-374
148	大和唐古出土の一金屬器に就て	直良信夫	10月	考古叢書	1	1-3
149	貨泉を出せる青松海外遺蹟	兩角守一	9月	考古學雜	21-9	665-670

祝部式時代關係

150	古墳	島田貞彦	7月	圖錄大成(單)	12	圖版48
151	日本古墳の系統及其發達(3)	木村幹夫	1月	日本研究	3	34-56
152	方形墳に關する二三の考察	淺田芳郎	2月	考古學	2-1	25-34
153	上代墳墓の社會性	淺田芳郎	6月	考古學	2-3	28-36
154	玖珠郡北山田村の横穴	河野清實	3月	大分縣報(單)	9	133-138

考古學文献總目錄

155	日向聖山の古墳に就て	河井田政吉	9月	史蹟名勝	6-9	763-764
156	仙崎町小濱山頂の石槨に就て	山崎徳三郎	12月	防長史學	2-2	65-66
157	垂水歌敷山古墳の調査	梅原末治	3月	兵庫縣報(單)	8	1-26
158	二三の考古學的見聞	淺田芳郎	2月	考古學	2-1	50-52
159	播摩國印南地方の古墳	淺田芳郎	5月	考古學雜	21-5	362-364
160	播磨の袖もぎ地藏(石棺)	淺田芳郎	2月	旅と傳説	4-2	41
161	乙訓郡にて新に發掘せられたる二古墳	梅原末治	3月	京都府報(單)	12	43-50
162	寺戸の車塚古墳	梅原末治	3月	京都府報(單)	12	51-52
163	桑飼村蛭子山作り山古墳の調査(上)	梅原末治	3月	京都府報(單)	12	53-70
164	古墳		3月	大阪府報(單)	5	82-85
165	美濃國加茂郡富岡村土藏洞古墳	林魁一	2月	考古學	2-1	45-47
166	吳羽山古墳横穴群	大村正之	5月	富山縣報(單)	11	1-10
167	吳羽山古墳横穴式石槨	大村正之	5月	富山縣報(單)	11	11-18
168	常福寺山古墳	九里愛雄	5月	富山縣報(單)	11	25-31
169	西山口村蘭ヶ谷神明宮境内古墳發掘調査	山崎鐵丸	2月	遠江會誌	1	31-32
170	磐田郡野部村上野部字栗下白山及八幡神社境内古墳	村松精二	2月	遠江會誌	1	39-40
171	周智郡飯田村陸實古墳出土品	坂中清雄	2月	遠江會誌	1	41
172	周智郡飯田村古墳	鈴木運貞	2月	遠江會誌	1	42-44
173	考古學上より見たる磐田郡の古代文化	西郷藤八	4月	遠江會誌	2	14-19
174	周智郡飯田村飯田古墳	山崎菊丸	4月	遠江會誌	2	20-22
175	周智郡飯田村古墳	山崎常磐 村松精二	4月	遠江會誌	2	23-25
176	遠江考古資料四件	西郷藤八	5月	考古學雜	21-5	358-361
177	榛原郡初倉村谷口字森下古墳	村田長兵衛	6月	遠江會誌	3	26-34
178	飯田村横穴古墳に關する報告	山崎菊丸	9月	遠江會誌	4	55-60
179	静岡市原史時代の遺蹟		6月	静岡市史(單)	1	30-64
180	南安曇郡穂高町上原區古墳發掘に就て	猿田文紀	1月	信濃會誌	2-5.6	168-171
181	大丸山古墳	仁科義男	5月	山梨縣報(單)	5	52-77



考古學文獻總目錄

182	大塚古墳	仁科義男	5月	山梨縣報(單)	5	78-93
183	石棺のある横穴	徳富武雄	2月	考古學	2-1	53
184	東京府下荏原郡東調布町嶺の横穴	徳富武雄 森根君	4月	人類學雜	46-4	133-148
185	日吉臺古墳發掘豫備報告	森貞成	6月	史學	10-2	334-337
186	安食町麻生古墳		3月	千葉縣報(單)	3	8-10
187	鷹之巢古墳見聞記	片倉信光	2月	上代文化	4.5	64-69
188	御陵墓に就て	本多辰次郎	9月	國史回顧	8	12-28
189	御陵墓並御葬送の概要	佐上愛山	9月 11月	吉備考古	9 11	23-26 17-20 26-28
190	大和國金田御陵と攝津國今城塚とを辨じて三島藍野陵に及ぶ	吉井良秀	5月 8月	考古學雜	21-5 21-8	369-374 591-599
191	遺蹟を通じて見たる遠駿豆三國の古代交通路	足立敏太郎	4月	歴史地理	57-4	322-328
192	埴輪聚成圖鑑 <small>(1-5)</small>	帝室博物館	1月以後	單行本菊二倍版		圖版20
193	埴輪に關する二三の考察	濱田耕作	10月	帝博講演(單)	11	51-65
194	埴輪の意義	後藤守一	1月	考古學雜	21-1	26-50
195	埴輪の始源及び生産に關する問題	永倉松男	8月	考古學	2-4	87-90
196	埴輪への二つの覺書	淺田芳郎	8月	考古學	2-4	91-94
197	甕棺埴輪私考	島田貞彦	8月	考古學	2-4	74-77
198	埴輪圓筒の合口棺	直良信夫	8月	考古學	2-4	95-106
199	埴輪家の研究	後藤守一	9月 12月	人類學雜	46-8 46-12	309-318 799-815
200	上古時代の家	後藤守一	6月	史潮	1-2	121-150
201	上古時代の住宅	後藤守一	10月	帝博講演(單)	11	1-50
202	埴輪と御神寶	後藤守一	8月	考古學	2-4	65-73
203	着裳の埴輪女子像發見	後藤守一	8月	考古學雜	21-8	601-602
204	上古時代の婦人の服飾	相川龍雄	12月	上	毛	176 1-6
205	埴輪に現れたる上代の愛鈴思想	相川龍雄	4月	上	毛	168 6-9
206	小形武人埴輪に就て	相川龍雄	12月	史蹟名勝	6-12	1026-1034

考古學文獻總目錄

207	顔面に窠書のある埴輪	相川龍雄	12月	考古學	2-5.6	176-178
208	猪を負ふ狩獵者の埴輪	相川龍雄	11月	考古學雜	21-11	806-809
209	鳥埴輪に對する考察	相川龍雄	2月	上	毛	166 1-7
210	動物の埴輪に就て	相川龍雄	3月	上	毛	167 1-4
211	北九州に於ける埴輪	島田寅次郎	8月	考古學	2-4	122-126
212	人物の繪畫ある埴輪圓筒	倉光清六	8月	考古學	2-4	113-116
213	伊豫荏原發見の埴輪窯址	柳原多美雄	12月	考古學	2-5.6	178-180
214	有緒埴輪圓筒	太田陸郎	8月	考古學	2-4	107-113
215	奈良縣多村の埴輪圓筒	島本一	8月	考古學	2-4	116-120
216	石見發見の有緒圓筒	島本一	10月	考古叢書	1	32-38
217	美濃發見の埴輪	林魁一	8月	考古學	2-4	120-122
218	本縣の古墳に遺存せる埴輪樹立の研究	仁科義男	3月	山梨教育	397	2-9
219	入間郡霞ヶ關村牛塚發見の埴輪	清水嘉作	5月	埼玉史談	2-5	350-351
220	埴輪三件 <small>1.埴輪家三例 2.埴輪家三例 3.埴輪家三例</small>	大場磐雄	2月	考古學雜	21-2	149-156
221	雞塚古墳發見の埴輪	佐藤行哉 後藤守一	9月	考古學雜	21-9	631-654
222	淺見氏菟藏埴輪其他に就て	相川龍雄	5月	上	毛	169 1-9
223	上代の鍬鏃の型態に就て	相川龍雄	8月	上	毛	172 16-25
224	朝鮮及び内地發見の耳飾に就て	藤田亮策	9月	文化叢考(單)		249-335
225	鏡と劍と玉 <small>(再版)</small>	高橋健自	11月	單行本菊版		本文326
226	岡山縣邑久郡美和村の獸首鏡	遠山荒次	8月	考古學雜	21-8	600
227	縁の形式と文様の異なる漢式鏡	久我春	12月	考古學雜	21-12	893-896
228	双龍鏡	荒山荒次	12月	考古學雜	21-12	899-900
229	上代人の愛玉思想に就て	大場磐雄	2月	上代文化	4.5	5-14
230	鐵石英の勾玉	久保菊夫	2月	考古學	2-1	53
231	北九州發見の子持勾玉	齋藤義	2月	考古學	2-1	49-50



232 裝飾付礫の一新例 樋口清之 12月 史前雜誌 3-5 256

祝部式時代以後

233 多度の貝塚と經塚 大西源一 1月 史蹟名勝 6-1 58-68  
2月 160-169  
234 由井貝塚發見の木履 鈴木敏雄 6月 考古學雜 21-6 374-378  
235 三重縣桑名郡柚井貝塚發見墨書土器 鈴木敏雄 11月 考古學雜 21-11 810-812

236 奈良時代に於ける一女性の墳墓 森本六爾 2月 考古學 2-1 6-15  
237 奈良時代に於ける墳墓の一例 和田千吉 6月 考古學 2-3 15-19  
238 佛心寺境内の火葬墳墓 淺田芳郎 12月 考古學 2-5.6 189-194  
239 乙訓村出土骨壺 柴田實 3月 京都府報(單) 12 93-94  
240 但馬出石神社近傍發見藏骨器 太田陸芳郎 6月 考古學 2-3 49

241 本邦出土の唐式鏡 後藤守一 12月 考古學雜 21-12 841-891

242 拂田柵址 上田三平 3月 史蹟名勝 6-3 227  
243 奥羽拓植史上の大發見拂田柵址見學記 中野榮吉 3月 史蹟名勝 6-3 228-240  
244 拂田柵址及び柵に関する考察 上田三平 7月 史學雜誌 42-7 773-800  
245 指定史蹟拂田柵址 上田三平 3月 單行本菊版 本文57  
246 厨川柵址と拂田柵址 安齋二郎 12月 歴と地 28-8 508-513  
247 出羽柵址考 上田三平 6月 史蹟名勝 6-6 440-445  
248 出羽柵址考追記 上田三平 7月 史蹟名勝 6-7 528-533  
249 山形縣本柵發見の柵址に就て 喜田貞吉 7月 歴史地理 58-1 1-21  
250 城輪の出羽柵址 阿部正己 12月 秋田會誌 3-5 11-24  
251 柵址管見 後藤宙外 12月 秋田會誌 3-5 25-34

252 水城史觀 武谷水城 4月 筑紫史壇 52 1-9  
253 建築構造の上より見たる水城關門址の礎石に就て 三條榮三郎 4月 筑紫史壇 52 10-11  
254 水城史觀補新 武谷水城 12月 筑紫史壇 54 24-34  
255 紫香樂宮址の研究 肥後和男 10月 滋賀縣報(單) 4 本文99  
圖版21

256 奈良時代窯址調査報告 京谷康信 11月 考古學雜 21-11 813-817

雜

257 播摩國西八木海岸洪積層中發見の人類遺品 直良信夫 5月 人類學雜 46-5 155-165  
6月 212-228  
258 直良氏播摩發見の所謂舊石器時代の石器に就て 鳥居龍藏 7月 上代文化 6 1-5

259 日本國家成立過程小論 土岐仲雄 6月 思想 109 733-747  
260 日本原始共產社會の生産及生産力の發展 渡部義通 7月 思想 110 40-54  
8月 111 147-162  
9月 112 209-317  
261 技術の發展 伊藤藏平 11月 國家成立(單) 3-73  
262 日本上代に於ける輻輳の起原と其使用 瀧川政次郎 8月 思想 111 184-198

263 古代の京都 藤田元春 2月 地理大系(單) 9 6-7  
264 古代の堺 松下清雄 2月 地理大系(單) 9 309-310  
265 古代諸族の盛衰 喜田貞吉 4月 地理大系(單) 1 131-137  
266 上代の武藏國 柴田常惠 6月 國史回顧 6 1-18  
267 埼玉縣史(1) 埼玉縣 12月 單行本菊版 本文596  
268 上代に於ける上信越の概察 岩澤正作 11月 上 毛 175 1-10

269 考古圖編(5) 東大文學部 4月 單行本菊版 圖版30  
270 帝室博物館圖錄 帝室博物館 單行本四倍版



考古學文獻總目錄

- 271 考古學資料模型圖譜 上野製作所 6月 單行本四六倍版 本文31  
圖版47
- 272 日本・風土と生活形態 小田内通敏 9月 單行本菊倍版 圖版35
- 273 帝室博物館年報 帝室博物館 10月 單行本菊版 本文150  
(昭和五年度) 圖版 51
- 274 Poor Memorandum 淺田芳郎 12月 考古學 2-5,6 194-197
- 275 能登島瞥見録 秋田喜一 8月 考古學雜 21-8 567-572
- 276 霞ヶ浦行田澤金吾 12月 史前雜誌 3-5 230-241
- 277 リサン師と姥山 大甲山 柏野 1月 史前雜誌 3-1 51-64
- 278 奥利根の先住民遺址搜訪記 豊國覺堂 7月上 毛 171 53-54
- 279 高崎西郊乘附山奥の踏査 豊國覺堂 6月上 毛 170 53-55
- 280 天覽出品目錄及解説 4月 備後史壇 7-4 1-4
- 281 郷土博物館第六回陳列品解説 鎌田共濟會 8月 單行本菊版
- 282 群馬縣郷土資料展覽會目錄 2月上 毛 166 38-45
- 283 大禮記念群馬會館落成記念郷土資料 岩澤正作 1月 毛 野 1-1
- 284 上毛電氣鐵道沿線 史蹟名勝天然記念物 岩澤正作 8月 毛 野 1-2 1-111
- 285 續古人類學閑話 松本彦七郎 3月 人類學雜 46-3 103-105
- 286 Skin-Boats 西村眞次 6月 單行本四六倍版 本文249

考古學文獻總目錄

C

日本内地歴史考古學的文獻

- 287 塔 石田茂作 4月 圖錄大成(單) 10 圖版48
- 288 瓦 塔 柴田常惠 3月 埼玉史談 2-4 227-239
- 289 土 塔 考 大脇正一 7月 東洋美術 12 91-101
- 290 背光型五輪塔 坪井良平 2月 考古學 2-1 1-5
- 291 六角塔婆並にその類似品に就て 稻村坦元 7月 考古學雜 21-7 457-472
- 292 六角塔婆と石幢の相違を論ず 跡部直治 11月 史蹟名勝 6-11 908-914
- 293 鎌倉時代に於ける國東塔 河野清實 3月 大分縣報(單) 9 107-114
- 294 原尻の瀧と附近の史蹟 河野清實 3月 大分縣報(單) 9 125-131
- 295 法隆寺五重塔下の空洞と法輪寺所藏三重塔より出現の佛舍利記に就て 田村吉永 7月 考古學雜 21-7 531-534
- 296 播磨法華山の金輪聖王塔 淺田芳郎 6月 旅と傳説 4-6 49-50
- 297 紀伊國三瀬村寺山廢寺址出土の石造相輪に就て 島田眞彦 1月 歴と地 27-1 87-96
- 298 美濃國武儀郡關町新長谷寺三重塔 林 魁 一 7月 考古學雜 21-7 535-537
- 299 信濃國小縣郡の石造多層塔 小山眞夫 7月 考古學雜 21-7 508-519
- 300 覺園寺の寶篋印塔に就て 跡部直治 7月 考古學雜 21-7 520-531
- 301 板 碑 名 稱 論 稻村坦元 8月 史蹟名勝 6-8 624-632
- 302 板 碑 名 稱 論 を 讀 む 深澤多市 9月 史蹟名勝 6-9 743-748
- 303 北埼玉郡龍興寺發見の青石塔婆に因んで板碑の稱呼を排す 稻村坦元 5月 埼玉史談 2-5 317-324
- 304 板碑はどうして生れたか 野尻康彦 2月 上代文化 4.5 47-53
- 305 阿彌陀來迎像と板碑 三輪善之助 6月 考古學 2-3 9-14
- 306 板 碑 と 阿 號 問 題 吉野嚴成 12月 武藏野 17-3 10-14
- 307 丹 後 の 板 碑 永濱宇平 7月 史と美 7 20-26  
8月 8 13-18
- 308 信濃現存の板碑 市川雄一郎 12月 史蹟名勝 6-12 1035-1039



考古學文献總目錄

309	甲斐國北都留郡野田尻村西光寺板碑	仁科義男	5月	史蹟名勝	6-5	415-417
310	延命寺の板碑	松下胤信	4月	史蹟名勝	6-4	325-327
311	鎌倉で見た新資料	服部清五郎	9月	考古學雜	21-9	674-684
312	隣接東京北郊板碑地名表	平野元三郎	6月	武藏野	17-1	19-22
313	元弘板碑の追記	三輪善之助	3月	考古學雜	21-3	234-235
314	大森町川端發見の板碑と古瓦	三輪善之助	11月	武藏野	17-2	8-16
315	兩野の板碑に現はれたる南北朝の紀年號に就て	丸山瓦全	11月	上毛	175	12-14
316	吾妻郡に於ける板碑の調査	金澤佐平	2月	上毛	166	8-17
317	久森峠にて板碑發見	浦野克彦	5月	上毛	169	12-13
318	東北の板碑と笠卒都婆	神林淳雄	7月	上代文化	6	20-26
319	宮城縣内の古碑	清水東四郎	3月	宮城縣報(單)	6	1-64
320	石製鴟尾に就て	田邊泰	8月	史蹟名勝	6-8	613-623
321	伯耆の石鴟尾及び廢大寺に就て	倉光清六	10月	史蹟名勝	6-10	850-862
322	遺物と傳説から廢金寺の研究	島田福雄	10月	考古學雜	21-10	742-759
323	因伯二州の寺址及古瓦	上田三平	9月	史蹟名勝	6-9	707-717
324	廣島縣下古瓦發見地	逸見敏刀	7月	安藝國	1	3-9
325	小陽漫談	三輪善之助	7月	安藝國	1	1-3
326	古瓦より見たる吉備文化	永山玄石	8.9月	吉備考古	8.9 6-12, 4-11 10.11 1-6, 1-7	
327	延喜式栗栖野瓦窯址と古瓦	川勝政太郎	1月	史と美	2	37-41
328	栗原寺址發見の古瓦に就て	島本一	2月	考古學雜	21-2	156-159
329	大和國高市郡檜前寺發見の古瓦	島本一	7月	考古雜筆	6	1-10
330	古瓦と建築	森田常治郎	10月	考古叢書	1	39-40
331	三井寺發見の古瓦に就て	石田茂作	11月	園城寺(單)		481-489
332	小縣郡泉田村の布目瓦	神津猛	1月	信濃會誌	2-5.6	179-187
333	信濃に於ける布目瓦發見地名表	神津猛	1月	信濃會誌	2-5.6	188

考古學文献總目錄

334	奈良朝時代の古瓦發見	金讚武藏	11月	埼玉史談	3-2	143-144
335	高野山大塔の鐘と六時の鐘	坪井良平	12月	考古學	2-5.6	162-168
336	三井の梵鐘	廣瀬都巽	11月	園城寺(單)		491-509
337	朝鮮鐘	高田十郎	5月	史と美	6	19-28
338	模造朝鮮鐘	高田十郎	11月	なら	55	10
339	飛鳥時代の文化	東洋美術研究會	11月	單行本四六倍版		本文162
340	中宮寺如意輪觀音	原田恭助	2月	考古學	2-1	16-24
341	逗子神武寺の石佛に就て	岡山泰四	5月	史蹟名勝	6-5	385-392
342	懸佛に就て	鹽田敏郎	6月	考古學雜	21-6	421-446
343	永満寺址の經筒	島田寅次郎	2月	史蹟名勝	6-2	131-136
344	都窪郡菅生村の經塚	尾崎菅生	8月	吉備考古	10	16-17
345	鞍馬寺新發見の經塚遺物	川勝政太郎	6月	史と美	7	32-38
346	伊勢の陶製經筒	三輪善之助	8月	考古學雜	21-8	564-586
347	富士山頂經塚出土甕片に就て	赤星直忠	5月	考古學雜	21-5	368-369
348	經筒發見報告	金讚宮守	5月	埼玉史談	2-5	349
349	經塚關係遺蹟に就て	相川龍雄	6月	上毛	170	10-12
350	別所の經塚	松田鑽	9月	上毛	173	3-4
351	經塚出土腰刀の一形式に就て	末永雅雄	10月	考古學雜	21-10	726-741
352	佛具(錫杖)	香取秀眞	4月	圖錄大成(單)	11	圖版48
353	州崎神社發見和鏡	堀江清足	12月	考古學雜	21-12	892-893
354	三河發見の和鏡	林魁一	12月	考古學雜	21-12	899



考古學文献總目錄

- 355 家藏の和鏡六面岡田儀一 12月 考古學雜 21-12 S96-S99
- 356 柄鏡の趣味廣瀬都巽 12月 考古學雜 21-12 S25-S40
- 357 鞍 と 鞆 弘津史文 8月 單行本四六倍版 本文48  
圖版29
- 358 古 錢 の 話 水原韻泉 6月 吉備考古 9 27-28  
8月 10 21-22
- 359 考 古 漫 談 水原韻泉 9月 安藝國 2 7-8
- 360 石卷鑄錢場について 寺崎彌兵衛 3月 宮城縣報(單) 6 64-72
- 361 東大寺現存遺物銘記及文様 筒井英俊 11月 寧 樂 14 1-196
- 362 對島の古金石文 高田十郎 11月 考古學雜 21-11 789-793
- 363 大分縣金石年表(4) 日名子太郎 3月 大分縣報(單) 9 161-178
- 364 既知金石文の二三の訂正 高田十郎 5月 考古學雜 21-5 355-357  
9月 21-9 671-674
- 365 奈良朝時代の紀年銘を有する小縣郡  
金石文の姿を辨ず 小山眞夫 1月 信濃會誌 2-5,6 172-178
- 366 我埼玉に於ける古道の一考察 小川浮城 1月 埼玉史談 2-3 165-174

考古學文献總目錄

D

日本内地以外考古學文献

北海道方面

- 367 アイヌと其史前 米村喜男衛 3月 郷土研究 5 本文46  
圖版15
- 368 北海道石器時代遺物發見地名表 谷 敬 一 1月 史前雜誌 3-1 55
- 369 大雪山上の石器時代遺蹟 河野廣道 11月 蝦夷往來 5 143-148
- 370 北海道石器時代の刻紋土器に就て 新岡竹彦 4月 蝦夷往來 2 43-51
- 371 再び所謂手宮古代文字に就て 關場不二彦 4月 蝦夷往來 2 33-42
- 372 樺捉島東海岸發見の骨牙器 谷 敬 一 9月 史前雜誌 3-4 173-183

琉球臺灣方面

- 373 琉球の旅(12,13) 金關丈夫 11月 歴 と 地 23-5 424-428  
12月 6 513-516
- 374 臺灣の先史時代遺蹟の概要 宮本延人 12月 史 學 10-4 639-694

朝鮮方面

- 375 雄基松坪洞遺蹟の調査 藤田亮策 11月 青丘學叢 6 191-192
- 376 京畿道高陽郡國祀峰の遺蹟に就て 横山將三郎 11月 史蹟名勝 6-11 887-907
- 377 朝鮮釜山府東萊に於ける甕棺發掘 森本六爾 2月 考古學 2-1 54
- 378 最近に於ける樂浪古墳の發掘 藤田亮策 2月 青丘學叢 3 196-197
- 379 慶尙北道達城郡達城面古墳調査報告 野 守 健夫 3月 單行本四六倍版 本文130  
圖版152
- 380 慶州金鈴塚飾履塚發掘調査報告 梅原末治 3月 單行本四六倍版 圖版214



考古學文献總目錄

- 331 朝鮮古蹟圖譜(11) 朝鮮總督府 3月 單行本菊四倍版 圖版171  
 332 古蹟調査及朝鮮史編纂附博物館 朝鮮總督府 12月 朝鮮要覽 227—230

滿洲・支那方面

- 333 南滿洲石器時代土器に關する二三の事實に就て 樋口清之 1月 考古學雜 21—1 51—73  
 334 滿洲石器時代石斧の遺物型態學的調査 樋口清之 7月 上代文化 6 5—15  
 335 南滿洲のドルメンと其方法 山本正次 8月 歴と地 28—2 165—170  
 336 牧羊城 原田淑人 12月 單行本四倍版 本文115 圖版116  
 337 新發見の漢代の壁畫古墳 濱田耕作 11月 大阪朝日  
 338 考古學上より見たる東蒙古 烏居龍藏 4月 東京日日  
 339 遼代の壁畫に就て 烏居龍藏 9,10,11,12月 國華 41—11,12  
 340 殉死に代へたる契丹古墳の人物畫 烏居龍藏 2月 上代文化 4.5 1—5  
 341 新發見の支那古人類と文化 松村 瞭 1月 中央公論 46—1 390—393  
 342 支那最古の人類の遺骨 西村眞次 5月 科學畫報 16—5 807—811  
 343 輓近の考古學上興味ある二大發見 加藤玄智 7月 神道學雜 10 59—66  
 344 天津北疆博物館に代表されし新石器時代の遺蹟 エ・リサン著 2月 人類學雜 46—2 35—46  
 345 蒙古多倫淖爾に於ける新石器時代の遺蹟 小江上水野 8月 人類學雜 46—8 291—296  
 346 張家口元寶山の洞穴遺蹟 小江上水野 9月 人類學雜 46—9 319—323  
 347 山東省黃縣瀧口附近貝塚に就て 駒井和愛 4月 東方學報(單) 東京 1 181—195  
 348 支那南京附近發見の石器時代遺蹟 八木英三郎 7月 福岡 50 11—12  
 349 支那古代の鼎形土器に就て 駒井和愛 1月 人類學雜 46—1 27—29

考古學文献總目錄

- 400 支那古代の銅利器に就て 梅原末治 11月 東方學報(單) 京都—2 85—138  
 401 ウィンスローフ氏所藏の支那古代の遺物 梅原末治 1月 歴と地 27—1 36—48  
 402 北支那發見の一種の銅容器と其性質 梅原末治 3月 東方學報 京都—1 49—90  
 403 所謂秦銅器に就て 梅原末治 9月 史學 10—3 411—438  
 404 米國フリヤ美術館所藏の象嵌狩獵文銅洗 梅原末治 1月 桑原論叢(單) 17—39  
 405 河南鄭州及滎澤縣發見の漢代墳墓と其遺物 梅原末治 3月 東洋學報 19—1 92—125  
 406 漢三國六朝紀年鏡集錄 梅原末治 8月 單行本四六倍版 本文46 圖版 6  
 407 支那古鏡鑑に關する二三の新資料 梅原末治 9月 歴と地 28—3 175—190  
 408 歐米に於ける支那古鏡 梅原末治 12月 單行本四六倍版 本文142 圖版 85  
 409 漢千秋萬歲鏡 濱田耕作 1月 桑原論叢(單) 289—296  
 410 工藝史上より見たる漢様式と銅鏡 長廣敏雄 3月 東方學報(單) 京都—1 213—247  
 411 支那出土の青銅刀子に就て 榎本龜生 4月 考古學雜 21—4 278—294  
 412 杖 鐵 其 他 榎本龜生 9月 考古學雜 21—9 655—664  
 413 師比並に孰落帶に就きて 江上波夫 11月 東方學報(單) 東京—2 276—283  
 414 玉 璧 考 水野清一 11月 東方學報(單) 京都—2 156—185  
 415 六朝の石枕 濱田耕作 2月 考古學雜 21—2 83—91  
 416 支那南北朝の陶器に就て 原田淑人 1月 考古學雜 21—1 1—11  
 417 東洋古代の硝子と釉 中尾萬三 4月 考古學雜 21—4 245—268  
 418 支那の瓦磚 關野貞 8月 啓明講演 43 29—62  
 419 考古隨錄 清野謙次 9月 歴と地 28—3 228—231

印度支那・印度方面

- 420 佛領印度支那の石器時代 アグノーエル 9月 史前雜誌 3—4 194—201  
 3—5 249—252  
 421 印度支那發見の漢鏡 森本六爾 12月 考古學 2—5•6 185—188



422 印度の博物館 橋川正 10月史 林 16-4 605-616

其他方面

- 423 アルタイ地方に於ける考古學上の新発見 梅原末治 3月史 學 10-1 1-27
- 424 一九二九年に於けるソビエツトロシアの考古學的調査 池上啓介譯 9月史前雜誌 3-4 201-203
- 425 アルタイの古代文化 グリヤズノフ 3月人類學雜 46-3 105-108  
平行傳三譯 7月 46-7 272-276
- 426 ロシヤに於ける渤海研究者及び文献に就て 小島武男 3月史 學 10-1 131-141
  
- 427 原始人の見た動物 伊藤秀五郎 3月科學書報 16-3 453-457
  
- 428 北歐に於ける中石時代マグレモジア文化概説 大山 柏 5月史前雜誌 3-2.3 59-158
- 429 巨石文化と洞窟文化 松本芳夫 9月史 學 10-3 517-539
- 430 ドルドニユ紀行 中谷治宇二郎 3月科學書報 16-3 453-462
- 431 エトラスカンの文化(2) 助川貞三 2月史 苑 5-5 340-354
- 432 文明發祥の地 クロフォード 5月史 苑 6-2 105-120
- 433 イラークの旅 定金右源二 11月史 觀 1 294-327
- 434 世界發掘物語 一氏義良 → 8月科學書報 17-2 → 6  
12月
- 435 世界遺蹟大概 新光社 10月 單行本四六倍版
- 436 世界古代文化史 西村眞次 12月 單行本四六倍版 本文530
- 437 歐米博物館の施設 後藤守一 8月 單行本四六倍版 本文126  
圖版 60
- 438 巴里の博物館 森本六爾 8月考古學 2-4 127-130

地域別索引(日本内地考古學文献)

- 九州地方**
- 福岡縣..... 88, 89, 90, 91, 92, 111, 112, 113, 114, 120, 137, 138, 301, 231, 252, 253, 254
- 長崎縣..... 23, 115, 129
- 熊本縣..... 67
- 大分縣..... 24, 139, 154
- 宮崎縣..... 25, 155
- 四國地方**
- 愛媛縣..... 94, 213
- 香川縣..... 281
- 高知縣..... 93
- 中國地方**
- 山口縣..... 156
- 鳥取縣..... 212, 236
- 岡山縣..... 57, 121, 226, 228, 230
- 近畿地方**
- 兵庫縣..... 58, 95, 96, 141, 157, 158, 159, 160, 214, 238, 240, 257, 258, 274
- 大阪府..... 97, 164, 264
- 京都府..... 161, 162, 163, 239, 263
- 奈良縣..... 98, 99, 122, 123, 124, 128, 130, 131, 148, 215, 216, 232, 256
- 和歌山縣..... 100
- 三重縣..... 101, 233, 234, 235
- 滋賀縣..... 255
- 中部地方**
- 岐阜縣..... 69, 217
- 愛知縣..... 68, 102, 103, 116, 134, 142, 143, 146
- 石川縣..... 275
- 富山縣..... 82, 166, 167, 168
- 静岡縣..... 26, 27, 28, 29, 30, 31, 104, 144, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 178, 179, 191
- 長野縣..... 32, 33, 34, 80, 127, 149, 180, 320
- 山梨縣..... 35, 36, 37, 37, 181, 182, 218
- 關東地方**
- 神奈川縣..... 39, 40, 41, 45, 47, 73, 81, 105, 106, 107, 125, 237
- 東京府..... 43, 44, 46, 48, 108, 109, 126, 183, 184, 185
- 埼玉縣..... 42, 49, 74, 83, 219, 267
- 千葉縣..... 50, 51, 59, 60, 277
- 茨城縣..... 52, 75, 85, 132, 276
- 群馬縣..... 53, 70, 209, 222, 278, 279, 282, 283, 284
- 栃木縣..... 221
- 東北地方**
- 宮城縣..... 110, 187
- 山形縣..... 55, 72, 247, 248, 249, 250
- 岩手縣..... 54
- 秋田縣..... 56, 86, 242, 243, 244, 245, 246



筆者別索引 (考古學文献總目錄)

**ア**

阿部正己..... 250  
相川龍雄.....204, 205, 206, 207, 208, 209,  
210, 222, 223, 349  
赤星直忠..... 106  
赤堀英三..... 13(脚), 76, 78, 79(共)  
秋田喜一..... 275  
アグノーエル..... 21, 420(脚)  
淺田芳郎.....95(共), 152, 153, 156, 159,  
160, 196, 238, 240(共), 274,  
296  
足立銀太郎..... 191  
跡部直治..... 292, 300  
有光教一..... 91(共)  
有吉憲彰.....12

**イ. キ**

伊東東..... 139  
伊藤藏平..... 261  
伊藤秀五郎..... 427  
池上啓介.....45, 52, 61, 424  
石田茂作..... 287, 331  
石野英..... 40, 63  
市川雄一郎..... 308  
稻村坦元.....291, 301, 308  
乾健治.....99

今井眞樹.....33  
今井弘樹.....34  
岩澤正作..... 53, 268, 283, 284

**ウ**

ウキツスラ..... 13(脚)  
植松考穆.....44  
植村恒三郎.....91  
上田三平..... 87, 242, 244, 245, 247, 248,  
323  
上野製作所..... 271  
梅原末治.....114, 137, 157, 161, 162, 163,  
380, 400, 401, 402, 403, 404,  
405, 406, 407, 408, 423  
浦野克彦..... 317

**エ. エ**

江上波夫.....395(共), 396(共), 413  
江口善次.....32

**オ. オ**

太田陸郎.....214, 240(共)  
大西源一..... 233  
大野雲外.....22  
大場磐雄..... 20, 64, 220, 229  
大村正之..... 166, 167  
大山栢.....16, 17, 51, 59, 60,  
277(共), 428

大脇正一..... 239  
小川浮城..... 336  
小栗鐵次郎.....134, 142, 146  
小田内通敏..... 272  
尾崎菅生..... 344  
岡山泰西..... 341  
岡田儀一..... 355

**カ**

加藤喜代次郎..... 312  
加藤玄智..... 393  
香取秀眞..... 253  
家守松枝..... 10(共脚)  
鏡山猛..... 88(共)  
笠原烏丸.....69  
片倉信光..... 108, 187  
金讀宮守..... 343  
金關丈夫..... 373  
金澤佐平..... 70, 316  
甲野勇..... 23, 35, 277(共)  
神津猛..... 333, 334  
神林淳雄..... 55, 318  
鎌田共濟會..... 281  
榎本龜生..... 411, 412  
河野清實.....154, 293, 294  
河野廣道..... 369  
河井田政吉..... 25, 155  
川勝政太郎..... 327, 345

**キ**

喜田貞吉..... 249, 265  
木村幹夫..... 151

菊池山哉.....54  
清野謙次..... 419  
京谷康信..... 256

**ク**

久我春..... 227  
久原市次..... 385(共)  
久保菊夫..... 280  
忽那將愛..... 79(共)  
倉光清六..... 212, 321  
クロフォード..... 10(脚), 432(脚)  
グリュズノフ..... 425(脚)  
九里愛雄..... 168  
黒田善次.....48

**コ**

小泉顯夫.....379(共)  
小泉武男.....426(脚)  
小林行雄..... 119, 124  
小牧實繁..... 18, 395(共), 396(共)  
小山眞夫..... 299, 365  
後藤守一.....194, 199, 200, 201, 202, 203,  
221(共), 241, 437  
後藤宙外..... 251  
駒井和愛.....336(共), 395(共), 395(共)  
397, 399

**ク**

佐上愛山..... 139  
佐藤行哉.....221(共)  
佐藤清明.....57  
齋藤義..... 231



齋藤房太郎..... 46, 81, 109  
西郷藤八..... 173  
埼玉縣..... 267  
定金右源二..... 433  
坂中清雄..... 171  
猿田文紀..... 180  
三條榮三郎..... 253

シ

清水嘉作..... 219  
清水東四郎..... 319  
柴田常恵..... 266, 288  
柴田實..... 239  
鹽田敏郎..... 342  
島本..... 122, 123, 180, 215, 216, 323, 329  
島田清..... 95(英)  
島田貞彦..... 5, 19, 99(英), 115, 148, 150, 197, 297  
島田寅次郎..... 211, 343  
島田福雄..... 322  
下村正信..... 128, 131  
新光社..... 435

ス

末永雅雄..... 351  
杉山壽榮男..... 62, 65  
助川貞三..... 431  
鈴木..... 39, 105  
鈴木運貞..... 172  
鈴木覺馬..... 26, 144  
鈴木敏雄..... 234, 235

セ

關野貞..... 418

タ

田澤金吾..... 276  
田邊泰..... 320  
田村吉永..... 295  
高田十郎..... 337, 338, 362, 364  
高橋健自..... 225  
高山健吉..... 27(英)  
瀧川政次郎..... 262  
武谷水城..... 252, 254  
谷敬..... 368, 372

ツ

筒井英俊..... 361  
坪井良平..... 290, 335

テ

帝室博物館..... 192, 270, 273  
朝鮮總督府..... 381, 382  
寺石正路..... 93  
寺崎彌兵衛..... 360

ト

土岐伸雄..... 259  
遠山荒次..... 226, 228  
東大文學部..... 269  
東洋美術研究會..... 339  
徳富武雄..... 183, 184(英)  
豊國覺堂..... 278, 279

鳥居龍藏..... 43, 258, 388, 389, 390

ナ

直良信夫..... 58, 96, 118, 145, 147, 148, 198, 257  
長廣敏雄..... 410  
永倉松男..... 88(英), 141, 195  
永澤謙次..... 110, 113  
永濱宇平..... 307  
永山玄石..... 326  
中尾萬三..... 417  
中川徳治..... 4, 104  
中根君郎..... 75, 126, 184(英)  
中野榮吉..... 243  
中谷治宇二郎..... 430  
中山平次郎..... 89, 90, 111

ニ

仁科義男..... 35, 36, 37, 38, 66, 181, 182, 218, 309  
西村眞次..... 3, 121, 286, 392, 436

ノ

野尻康彦..... 304  
野守健..... 379(英)

ハ

橋川正..... 422  
服部清五郎..... 132, 311  
濱田耕作..... 193, 387, 409, 415  
林魁..... 165, 217, 299, 354  
原田恭助..... 340

ヒ

原田淑人..... 389(英), 416  
樋口清之..... 24, 72, 94, 98, 232, 383, 384  
肥後和男..... 255  
日名子太郎..... 363  
平竹傳三..... 425(英)  
平野元三郎..... 312  
廣瀬都巽..... 336, 356  
弘津史文..... 357

フ

深澤多市..... 302  
藤井誠一..... 100  
藤田元春..... 263  
藤田亮策..... 224, 375, 378  
藤森榮一..... 127

ヘ

逸見敏刀..... 324

ホ

堀江清足..... 353  
本多辰次郎..... 188

マ

松下胤信..... 41, 125, 310  
松下清雄..... 264  
松田鑽..... 350  
松村瞭..... 391  
松村武雄..... 14  
松本信廣..... 394(英)



考古學文獻總目錄

松本彦七郎..... 285  
 松本芳夫..... 429  
 丸茂武重..... 15  
 丸山瓦全..... 315

三

水野清..... 395(註), 396(註), 414  
 水原韻泉..... 358, 359  
 宮本延人..... 374  
 三輪善之助..... 305, 306(註), 313, 314, 325, 346

ム

武藤一郎..... 56  
 武藤鐵城..... 36  
 村田長兵衛..... 177  
 村松精二..... 23, 29, 170, 175(註)

モ

森貞成..... 185  
 森貞次郎..... 112, 120  
 森德一郎..... 116  
 森田常次郎..... 330  
 森本六爾..... 6, 7, 8, 9, 10(註), 11, 133, 135, 136, 138, 140, 236, 421, 435  
 兩角守一..... 84, 149

ヤ

八木契三郎..... 398  
 八幡一郎..... 1, 47, 67, 71, 73, 74, 77, 80, 82, 83, 107, 117

柳原多美雄..... 213  
 山口麻太郎..... 129  
 山崎菊丸..... 174, 178  
 山崎鐵丸..... 169  
 山崎常磐..... 27(註), 175(註)  
 山崎德三郎..... 156  
 山村青作..... 2  
 山本正..... 385(註)  
 山本博..... 92

ヨ

横山將三郎..... 50, 376  
 吉井良秀..... 190  
 吉田富夫..... 68  
 吉野嚴成..... 306(註)  
 米村喜男衛..... 367

リ

リサソ..... 394(註)

ワ

和田千吉..... 237  
 鷲山恭平..... 27(註)  
 渡邊義通..... 260

讀不明

安齋二郎..... 246  
 一氏義良..... 434  
 新岡竹彦..... 370

著者不詳

30, 31, 49, 164, 179, 186, 280, 282

考古學主要論文梗概並批評

昭和六年度



## 凡 例

1. 主要文献と云ふ言葉は誤解を生じ易い。こゝでは考古學界に何等かの形で問題になつたものと簡単に解釋して欲しい。
2. 梗概は著者手記にかゝるものを主とし、若干の編者抄出を配した。次輯では全部を著者の手記にしたい希望を持つてゐる。
3. 各論文題目末尾に附した番號及び批評文中に引用挿入した番號は本書目録中の文献番號である。
4. 編者の文献に就ては今日自ら甚だ不満に思つて居る。敢て自らに批評を加へないが、今後の仕事に於て、表して行きたいものである。
5. 主要文献紹介及批評は更に多方面に亘つて果したい豫定であつたが、編者に偶々病が發し、萬事を擲つて靜養しなければならなくなつた。限られた範圍に終つて甚だ遺憾である。是は第2輯で責任を果すことにし、其迄の猶豫を乞ふ次第である。

## 八 幡 一 郎 先史考古學に於ける分類 (1)

### 梗概

先史考古學に於ける分類には種類別の分類・質量による分類・一種遺物の型式分類等がある。一種遺物に關する型式分類の研究は比較的最近に起つた。併しその多くは形だけの相異紋様の精粗などに基いた極めて素朴なものであつた。今後の型式分類は遺物を文化所産として内容的に企劃すべきだ。之には遺跡に於ける各種遺物の組合せの研究が根本である。それは層位的概念によつて貫かれねばならぬ。さり乍ら斯くして遂げた型式分類はそれ自身大して重要でない。文化の推移、傳播の跡を知る手懸りとしてのみ必要なのである。(著者手記)

### 批評

本論文に就ては山村青作氏の批評が(2)ある。氏は分類に於て中間型式を暫く除外し、純粹型式のみを取扱ふべきこと、及び考古學にあつては遺物は嚴然たる實在であり、考古學者は是等の確固たる認識を通してのみ古代に於ける現實を引出し得ると述られてゐる。吾々は、例を遺物に求めて問題の具體的取扱ひをなし教を一般の研究者に垂れられむことを、八幡氏に切望するものである。

## 森 本 六 爾 飛行機と考古學 (11)

### 梗概

此小著には空からの考古學、飛行機と日本考古學、考古學的航空寫眞の三篇を收めてゐる。

1. 空からの考古學は航空寫眞を契機として生れたものである。是は飛行機を飛ばして鬭争の爲にする敵への偵察を、ヒュマニチーの爲にする遺蹟への觀察に置き換へた。地上での發掘や調査によつて、其の性質及範圍の肉眼で明瞭な遺蹟を空中より撮影した最初の段階から、地上では見えぬ地下の遺蹟を掘り出すユニークな第二の段階に進んでゐる。

2. 飛行機と日本考古學は嘗つて日本で掘られた朝鮮樂浪古墳、千葉縣姥山貝塚等の考古學的航空寫眞の歴史を回顧し、併せて將來への展望を試みたものである。貝塚・高塚古墳・條理制遺構・城柵等の調査は飛行機を飛ばすべきであると主張する。

3. 考古學的航空寫眞は Crawford 氏論文の譯出である。是は影による遺蹟撮影・土壤によ



る遺蹟撮影・作物による遺蹟撮影の三項から成り、多數の經驗を、提要書の形態にまで纏め上げたものである。

以上の三つのスローガンは考古學と、航空機のもつ近代的科學性との、關係づけを意圖したものである。(著者手記)

### 大場 磐雄 關東に於ける奥羽薄手式土器 (64)

#### 梗概

關東地方に於ける或時期の石器時代遺蹟から、往々東北地方に發達分布した縄文土器の發見せられるが之に關する先人の考察を記し、現在に於ては甲野氏の模倣説、八幡氏の南漸説、山内氏の併行説がその代表でありとし、次に東北に於ける這種土器の特質として、それは奥羽に於て完全したもので、且つ縄文土器の極盛期から終末期の状態を示し、遺跡が南から北へと分布し津輕海峽前後で終末を遂げたとし、之に對して關東地方出土の該式土器の特徴を見ると、それは何れも薄手式土器と作出して單獨遺跡がなく、伴出の薄手式土器は關東縄文土器編年に於て中期以後のものであり、その分布は多摩以西より東北に存し、又奥羽出土の該式土器と對比して全く同一でなく酷似又は類似する事及び奥羽出土の該式土器の編年に於て前半期の物と一致する事を挙げた。次に關東及び奥羽の該式土器とを比較して、その發生に及び、奥羽に於てはほぼ完成の域にある事から、その未完成の姿相を何れかに求むべきを述べ、關東に於ける該式土器と薄手式土器との連鎖を認め、關東薄手式土器が該式土器の母體たり得るとし、關東に於て發生し北漸して完成せられたものであらうとした。次に翻つて我國の古典に徴すると蝦夷又は東夷と呼ぶるものは、當時の大和朝廷から低級文化民族と賤稱したものであつて、これが縄文土器使用者に該當するとし、日本上代文化の傾向が東漸及び北漸した事に立脚して、この大勢は間接に縄文土器の北漸とも一致する事を記述し、最後に如上の諸點から該式土器の北漸を假定しその移行の時期は不明であるが、關東に於ては古典に見ゆる東夷征討の古傳説に反映してゐるであらうと説いたのである。(著者手記)

#### 批評

近時縄文土器研究者間に論議されつゝある奥羽薄手式土器(龜ヶ岡式土器)の問題、特に其の發生に就て一の高見を示されたものである。著者が一地域のみに拘はれることなく、より綜

合的な見地から考察されたることを喜ぶ。該式土器に就ては今後も益々論議されるであらうが、其は分布と分類の正しい認識から解決點が見出されることと思ふ。後半古典の解釋は史家としての著者の優秀なる技倆を示すと共に、日本上代史に多大の寄與をなすものであらう。

### 赤堀 英三 磨製石斧の形態と石質との關係に就て (76)

#### 梗概

石器の形と質に相關があるかどうかは興味ある問題である。研究材料を東大人類學教室所藏の磨製石鏃に限り、型式もA型(遠州式)B型(彌生式)C型(三味線形、又は關東式)の三型式のみに限り、他の型式及び中間型式を豫め除く。遠州式には緑泥片岩、關東式には珪岩及砂岩、彌生式には閃綠岩が比較的多く用ひられてゐると言ふ從來の説を肯定し、更に土器に於ける厚手式薄手式彌生式の型式推移説に従ひ、三型式の石斧は編年的に遠州式關東式彌生式の順序に配列すると考へる。次に從來の論者が、打製石鏃に於ける形と質との相關なきこと、之と引合に出してゐるのを極力否定して、其は勇敢な論理の飛躍だと評する。最後に岩石の性質を考慮して形と質の問題を文化の進展に伴つて天然の背景が刻々に其の姿を變へて行く一例と解釋する。

#### 批評

例を磨製石鏃に求め、石器の形と質の問題に寄與されたものである。この問題は著者の一層洗練された最近の論文「史前人の岩石利用に關する一問題」に於て尙吟味されてゐる。其れでは打製石鏃も地方によつては磨製石斧と等しく撰擇が行はれたらしいことをエレガントに示す。本論文に就ては別に八幡氏の批評(77)がある。氏は、本論文を甚だ有益なものとし、次に最初三型式のみを選ばれたことを疑問とし、論文後半で厚手式薄手式彌生式の型式推移關係を基にA→B→Cの一方向的推移を想定することに異論があるとされてゐる。

### 赤堀 英三 打製石鏃の地域的差異 (78)

#### 梗概

打製石鏃の地方的分布に關する從來の知識を別の方面から纏め上げやうと意企した論文である。東大人類學教室が所藏する、478遺跡より出土せる1995本の打製石鏃を、形態と石質との兩方面より調べた結果、有柄型(A型)と柳葉型(C型)とは北日本に多く、無柄型(B型)は西



日本に多く、且つその變化は地理的に漸次的であり、及び打製石鏃の石質分布は大體地質分布にコレスポンドしてゐる。

## 批評

著者は本論文で、石器の地方的分布に関する問題を取扱ひ、従來の散漫な知識を或る形態にまで整頓した。例を打製石鏃にとつてゐる。その興味深き型式の分布形態に就て、何等具體的インタープリテーションを與へず「其は各種遺物間の有機的關係に期待するより外に途はあるまい」と將來の計劃を潜めてゐられる。文中苦心になるダイアグラムの挿入が眼立つ。

## 島田貞彦 甕棺内新出の玉類及布片等に就いて (115)

## 梗概

本編は、肥前國南高來郡三會村に於ける甕棺内出土遺物の報告を以つて主體となし、併せて若干の考察を試みたものである。三會村景化園跡の甕棺埋没地域に一の石蓋單甕棺が発見された。棺外よりは狭鋒銅鏃2口、棺内よりは勾玉1個管玉1個布片人骨片等が出た。銅鏃は作優秀で漢代の製作となすべきもの。布片は明石國助氏によつて其組織が最も原始的とする平織であり、且つ樹皮纖維であることが明にされた。勾玉は硬玉製で、其の手法史前時代のものと相似たのを特色とす。管玉は著しく古調を帯びた碧玉岩製である。此の遺跡の検出は、單に甕棺内より玉類及び布片を新出した特殊の例としても興味を惹くが、肥前有喜貝塚と對比することに於て、一層意義づけらる。同貝塚発見の土器は肥後阿高及び轟、備中津雲のものと同性質のものが少くない。然かも斯様な貝塚構成と伴存した鐵鏃は、古墳時代のものに類似し稍々發達した形式と推すことが出来、該貝塚の古さを測る一根據をなす。而して種々の考察から西紀1世紀から3.4世紀に近いものとせられないこともない。一方、本遺蹟も年代を略同様な、しかも下限の稍々溯るものと定めて大過はなからう。しからば茲に二つの異つた社會相を有する住民の存在を認めざるを得ない。一は繩文式系、一は彌生式系である。(編者抄出)

## 批評

著者は自ら才能の危を警めて、其の豊富な經驗を常に記載中心の考古學の型で發表される。本論文は、其の資料に恵まれた成功の例であらう。今後著者年來の企圖たる北九州地域研究の進展に依り、本論文の甕棺遺跡と肥前有喜貝塚との比論を一層エレガントに示されむことを祈る。

## 小林行雄 彌生式土器に於ける櫛目式文様 (119)

## 梗概

本稿は次の二つの意圖を目標として書かれてゐる。

1. 土器形態と文様との相關關係に様式的標徴を認識する事によつて土器の様式研究を提唱せんとする方法論的意圖。

2. 材料を櫛目式文様を選ぶ事によつて、北九州彌生式と彌生町式土器との中間に介在する彌生式土器に若干の地域的様式が存在を容認しようとする様式史的意圖。

内容を次の如く分つて論を進めてゐる。

**緒論 分類 施文** 櫛目式文様の定義とその表現形式による分類。用語統一の必要に就き私見を述べ、新澤発見の施文具に就いて考察する準備的研究。

**應用** 大和新澤彌生式土器文様の統計學的處理によつて口縁部形態と文様との様式的關聯を實證し、之を大阪灣沿岸文化圏に於ける様式として再認識す。

**分布** 實例を擧げて、關門地方、中央瀬戸内西(安藝豊後)、中央瀬戸内東、大阪灣沿岸、東海地方、中部高地、武相地方等の文化圏を想定し、櫛目式文様が中央瀬戸内西に於いて様式的固定を見せてゐる事、東海地方以東に於いて様式的解體の途をたどれる事、西に於いて青銅器との連關を見、東に於いて繩文文化からの影響を見得る事等を論ず。(著者手記)

## 批評

著者は本論文に於て、北九州と關東との中間に介在する地域の彌生式土器の闡明に一の躍進を與へた。單なる施文の手法の鎖末にとらへられず、若干の地域的様式が存在を認めて、文化圏を想定せむとした眞摯な態度を多とすべきである。尙今後の研究の進展によつて、本論文の再吟味をなす機會もあるべく、細部の補正を試んで、わが彌生式土器文化の研究に歴史的貢獻をなされむことを祈る。

## 森本六爾 日本に於ける青銅器文化の傳播 (133)

## 梗概

本論文は日本に於ける金屬器文化傳播の原初形態の問題を取扱つたものである。例を銅鏃銅



劍と銅鐸とに求めた。兩青銅器は其の本來の形態から退化形態への方向を辿り、同時に小形より長大化への傾向をとつた。兩青銅器中、銅銚銅劍は瀬戸内海以西に、銅鐸は瀬戸内海以東に主要の分布圏をもつ。兩器共に舊き型式は西に、漸次新しい型式が東にある。兩器の分布の重り合つてゐる瀬戸内海地域に又兩青銅器が伴存した遺蹟がある。此の事實を經とし、彌生式土器、石劍、多鈕細文鏡の考察を綜として觀ると、銅銚銅劍と呼ばれる銅利器で代表される古い文化相と、銅鐸と呼ばれる銅容器で代表される新しい文化相の存ることが認められ、文化は銅銚銅劍 A 型式地域→同 B 型式地域→同 C 型式地域→銅鐸 A 型式地域→同 B 型式地域→同 C 型式地域の順序で西より東に傳播した。日本青銅器時代の編年の如きは、傳播の速度の形で現されるであらう。(著者手記)

## 梅原末治 筑前井原發見鏡片の複原 (137)

## 梗概

昭和五年福岡市に於て青柳種信の『柳園古器略考』が發見され、有吉憲彰氏の手で複本の出版を見た。同書中に「同郡井原村所掘出古鏡圖考」と題する一篇があり、天明年中(西紀1781—1788)に發掘された筑前井原遺蹟出土古鏡破片の拓影35個を掲げてゐる。重複の破片9個を除いて複原を行つた結果18面分のものであることを知つた。共に所謂方格規矩四神鏡の範疇に屬するものであるが、一面も同一の式を見ない。其の各が違つた銘文乃至文様帯から成つてゐる。大體は王莽前後に比定すべきものであるが、後漢に屬する若干の作品を含んでゐる。

(編者抄出)

## 批評

本論文は、中山平次郎博士によつて創められた古鏡複原の方法を採り、考古學に於ける技術的方面に再度の貢獻をされたものである。再度といふのは嚮に筑前須玖發見の古鏡片を複原發表された經驗を所有されるからである。前例に於ては實物による複原の強味を示し、今回は拓本による苦心を示された。言はれる所の18面については、別に再吟味される日が來るであらう。併せて著者の如き古鏡研究の權威によつて、今日甚だ亂雑に設定されつゝある鏡の名稱の整理に、實際の範を示されむことを切に期待するものである。

## 後藤守一 本邦出土の唐式鏡 (241)

## 梗概

傳世品を除き、本邦出土の唐式鏡について、綜合的記述を試みやうとしたものが本編である。31個所の遺蹟から出た48面の出土例を個別的に記述し、其の結果遺蹟としては墳墓の外に地鎮の爲のもの及び經塚關係のものゝあることを知つた。墳墓發掘例が僅に6個所に過ぎないのは、其の頃になされた墓制の變化に基くものであり、唐式鏡は單に服飾具の一として埋められたに過ぎないであらう。唐式鏡はまた漢式鏡に比し、其を以つて遺蹟の年代を測定することが不可能な時もある。最も類例の多いのは、海獸葡萄鏡と伯牙彈琴鏡とであるが、和鏡に及した影響は極めて少い。唐花雙鸞八花鏡、花枝雙蝶八花鏡、唐草雙鳳八稜鏡は前二者に較べ發見數は尠いが、和鏡發達史の上に於て注意すべき點を含む。(編者抄出)

## 批評

本論文で著者は、從來忘れられ勝ちであつた本邦出土唐式鏡の資料を一括して、學界に提供した。50頁に及ぶ論文は、常に資料の提供を、集大成の型に於てなされる著者の疲れを見せぬ精力と知識の該博性とを充分に示すものであらう。文中に於て著者は更に提示の資料を吟味し、記載事項を整頓して、問題の一層正しい取あげ方を爲さんことを計劃して居られる。吾々は其の意念に多大の期待をかけるものであつて、著者の努力により學界未開拓のこの分野が今一層闡明せられむことを祈る。

## 上田三平 拂田柵址 (245)

## 梗概

拂田柵址は、秋田縣仙北郡高梨村大字拂田及同郡千屋村大字本堂城廻の地籍に在つて、昭和五年新に其形態を知られたものである。仙北平野に存する眞山長山の二丘陵を中心として其の周圍なる水田中に腐朽せる角材が一定の配列を以て埋没してゐるのが此の遺跡の特色である。

角材の配列は二種類からなる。一は外柵にて環狀柵を形づくり、他は内柵にして一直線に配列する。外柵には前記二丘陵を繞り列中四方に各々三間二面掘立式の門趾があつた。内柵は長



森丘陵の北麓水田中にあり、中央と同じく三間二面の門趾がある。種々の點より外柵が後に營まれたと認められる。出土遺物中、「最上四」とある柵木、石帯の飾石、「件補請取」とある木札、「厨家」の墨書銘ある土器、布目瓦等が特に注意を惹く。

此の遺跡は奥羽古代史上の「柵」に當る。古史の「城」と「柵」とは何等かの區別があつたらしく、前者は築城系統であり、後者は木柵を以つて自然の地形を補ひ屯兵及民居の中心たらしめた施設と考へられる。而して拂田柵は先づ内柵と自然の地形とに據つた防禦設備であつたが、後に至つて奥羽拓殖の進行に伴ひ多數の民居を收容する必要が城郭觀念と結合し、規模を擴大して外柵が營まれたらしい。即ち、拂田柵址に於ては「柵」の新古の二形式を持ち、新形式の完成された時期は陸奥北方経略が漸次進み膽澤・志波兩城を築いた頃若しくは其に近い年代に置くべきであらう。(編者抄出)

## 批評

著者は考古學的な發掘によつて、奥羽拓殖の古代史研究に、歴史的な貢獻をされた。實に史學は一つの型を示したかに見える。此の貢獻は、調査に豊富な經驗をもつ著者が、四周の木柵と同様に木柵内の遺構施設に一層注意を拂はれることによつて、完全するであらう。

## 直 良 信 夫 播磨國西八木海岸洪積層中發見の人類遺品 (257)

## 梗概

播磨國明石郡大久保村八木字西八木西谷海岸の斷崖に露出してゐる礫層から、私が發掘した、日本洪積世人類の遺品は、色々な意味で重要な問題とされるに至つた。つまり、この發見は、今まで未詳とされてゐた、舊石器時代が、日本にも存在してゐた事實を、私共に知らしめたのであつた。私の發掘したもの、中で、明に人類の遺品と目されるものは、數箇の石器であるけれども、礫層と同一の取扱ひを要する砂質植物化石層から發掘した哺乳類の化石骨の中には、人爲になつたと見る可き、工跡を止めてゐるものがある。私の今日までの研究からすれば、石器は、整つた、形式學上の分化を見せてゐず、只、自然石の一端に、兩面から加工して、所謂刃を付けてゐる程度のものである。もし、歐洲の舊石器時代の夫に對比する事が出来るとしたら、私はプレ・シェレアン Pre-Chelléen にあたるのではあるまいかと考へる。又、この礫層からは、哺乳類化石としては、日本鹿 *Cervus nippon nippon* Tem. *Cervus* sp. 舊象 (ナウマ

ン象) *Palaeoloxodon namadicus naumanni* Mak. 及び舊象の一種 *Stegodon* sp. を出し、植物化石としては、カラタチ、テリハノイバラ、ヤマザクラ、その他を出土する。従つて、地質時代は、*namadicus* の示す點よりして、一應は下部洪積期にあたるのではあるまいかも、考へられるのであるけれども、この象齒化石の進化程度は、今まで東日本で發見せられてゐる同種のものよりも、ずつと進んだ型のものである事が認められるから、私は、中部洪積期時代の成生層であらうと考へてゐる。つまり、その地質時代も、やはり、Pre-Chelléen の夫に、ほぼ對比せられる。日本では、近來、非常に多く、洪積世の哺乳化石を出す様になつた。之は、私共の如く、舊石器を研究するものにとつては、看過してはならない大切な點である。殊に、九州、山口、高知、栃木地方に於て、石灰洞中から、多種多量の化石骨の發見を見てゐる。支那周口店洞窟の夫を思ふにつけ、私共の心は躍る。(著者手記)

著者追記。本論文中の哺乳類化石については、その後の研究よりして、當然訂正しなければならない點がある。本抄録では、その一部を改めて置いた。御諒承を願ふ次第である。

## 批評

著者は、日本に於ける舊石器時代有無の問題に、廣く注意と興味を與へた點で完全に成功した。本論文に就ては別に鳥居龍藏博士が批評を試み(258)られた。石器の形から見て寧ろ Eolith の問題として取扱るべきであらうとされてゐる。

## 原 田 淑 人 牧 羊 城 (386)

—南滿洲老鐵山麓漢及漢以前遺跡—

## 梗概

南滿洲老鐵山麓牧羊城所在の丘陵は、附近一帶と共に、石器時代から周末にかけ、既に住民の聚落地であつた。然して此の地に一の土城址がある。昭和三年秋の發掘によつて、其の創建は前漢初期と推定され、王莽時代まで存続した形迹がある。其の構造規模より察して漢代縣治の跡と考へられる。恐らくは歴史にある遼東郡18縣の一たる沓水縣の其れであらう。城址附近一帶に亘る多數の漢墓の存在は此地の繁榮を語り、附近より發見された封泥によつて支那中央との連絡を知る。牧羊城附近の古墓は貝墓・石墓・甕棺・壘周墓の四種類に分けられる。壘周墓とは燒土を以つてせる土棺を、禮記の記事より推して名づけたものである。四種類の古墓の中、石墓・甕棺・壘周墓は周末漢初の頃に、貝墓はやゝ遅く前漢より後漢に亘る頃に、年代



を置くべきことは、發掘遺物によつて察せられる。聖周墓から發見した銅劍・銅鉄・銅斧・銅製劍柄等は、滿洲・朝鮮・日本内地に於ける出土の銅器諸例と併せ、支那文化東漸史上頗る興味がある資料である。その文化東漸は前漢の武帝を境としてこれを觀るべきである。(編者)

## 批評

著者は其の卓絶せる結論に於いて、完全に漢の武帝を中心とする支那の史學に貢献された。聖周墓の如き禮記による新名稱の設定も其故に點頭れる。本書は非常に豪華な出版體裁を備へてゐる。併せて廉價な普及版の刊行が望しい。普及版を求める人々が此の書を正當に理解批判するであらう。

## 濱田青陵 新發見の漢代の壁畫古墳 (487)

## 梗概

昭和6年南滿洲旅順の東、營城子牧城驛沙崗屯に於て一基の壁畫古墳が發見された。古墳は圓形の封土を有し、内部は甌窠の四室墓で、室の底面を地下に置いてゐる。主室は套堂を具へてゐるが、これは南滿洲に於ては未曾有のことである。室内の彩色の儼存は、「タペストリー」の持つた部室に這入つた様な感じを與へる。壁畫は、主室の内室に於て、一は其の外部全面に屋上まで、他は其の内部四壁の腰以下に、白い漆喰塗りの地に施されてゐる。

畫は供養の光景や守護神の圖を現すものらしい。筆致は古拙粗略恐らくは陶工の畫心のあるものが描いたのであらう。此の墓は以前一度盜掠に遭ひ、今次の發掘では僅に瓦製明器等を得た。棺は主室になく、却つて前室にあつた。營造の年代は墳の構造其他から見て漢代恐らくは後漢頃であらう。(編者抄出)

## 批評

本論文は著者の長年月に亘る東亞考古學研究の連鎖の一環をなすものである。且つ比類のない美術考古學の見識を以つて壁畫古墳を對象に選ばれた。かつては報告文記載の様式を確立して考古學の歴史に貢献されたことゝ用語に對する充分な注意の下に素描風な論述を試みられたものである。素描であるが故に、又暗示にとむ。本論文に見るが如き、論文中の「素描性」と「暗示性」の存在は、將來考古學に於ける隨筆文の記載様式確立の上に、多くの暗示を與へるであらう。

## 鳥居龍藏 遼代の壁畫について (389)

## 梗概

內蒙古、興安嶺の内部、ワールマンハには三基の遼代帝王陵がある。所在の位置から三陵を東陵・中陵・西陵と命名しやう。中陵は聖宗陵、西陵は道宗陵であるから、東陵は興宗陵に當る。三陵共に同一形式で、地下に存在し、内部は穹廬の形をなしてゐる。陵内の壁面には畫があつた。稍々瞭かに残されてゐる東陵入口では、人物畫・山水畫・裝飾紋様が認められる。人物畫は山水畫と共に遼代の繪畫を知るべきもので、這是また明かに北宋の繪畫を語るものである。北宋の人物畫や山水畫は『宣和畫譜』に畫題とその畫師の名は見えるが、今日容易に正しい北宋畫に接することが出来ない。然るに遼代帝王陵の壁畫は充分北宋畫の研究資料を提供する。其の特色はともに寫實派、即ち彩色の繪畫であつて、決して南宋畫に於けるが如き理想派のものではない。裝飾紋様は雲・龍・鳳鸞・鸚鵡・蝶・牡丹・龜甲・大極等の諸文からなり、室の天井部を飾る。其の紋様の諸分子と構成は裝飾として當時に流行したもので、かの六朝・隋・唐に於て流行した西域的臭味はなく、全く北宋代の漢族自覺的のそれが著しく認められる。北宋文化の感化と流行は單に遼のみならず、日本にも影響してゐる。彼の宇治平等院内の裝飾紋様の如きは此の壁畫とよく類似してゐる。管に裝飾紋様に限らず繪畫に於ても感化影響を受けてゐる。此の點は從來の學説たる藤原時代の藝術や文化は唐と絶縁して後自から日本民族化した或特種のものといふ考に對し、五代から北宋との關係を尙ほよく考へ直さねばならないことを教へる。(編者抄出)

## 批評

本論文は、其の前半に於て探險による新しい資料の收獲を記述する。後半には著者特有の天才的閃きが表れ、遼藝術と藤原藝術と比較される。此の提唱は甚だ異色に富んでゐる。是の新説の主張を一の躊躇もなく廣く學界に傾聴させるために、今後著者は必要とする基礎的且つ決定的な論文執筆の勞を惜しまれないであらう。



## 梅原末治 所謂秦銅器に就いて (403)

## 梗概

所謂秦銅器は L. Wannick 氏の獲た Li-yü 發見品から注意を惹いた。其は一のフンドをなし、遺物は銅器・漆器・土器・骨角器・玉器の類にまたがつたが、其の大部分を占めた銅器に於ては、従來の銅器と著しく對稱的な特徴が認められた。特に大形銅容器について言はう。所謂三代の器と異つて、器の作りが割合に薄手である、形は輕快となつてゐる、圖文は型に據る同一文を繰返す表出法を用ひ既に流麗化の域に達してゐる。他の東西に亘つて考査した類例もこの特徴を一層明瞭にする。斯様の特徴を持つ銅器の様式の支那に於ける存在は、壯重奇古な三代の器と薄手輕快な漢器との中間に位置し、其の存在の實年代は、伴出遺品等の考察から戰國末に其の一點を持つとすべきである。この一見中間型とも見ゆる新様式の出現には、西方文物の影響を考へしめるものを藏してゐるが、其の新來のエレメントとしてコーカサスの Koban の銅器の加飾との關係を認めることは現在に於て一の見解となり得るであらう。(編者抄出)

## 批評

外遊以來著しく高揚し來つた著者の知見は、一時觀賞の流行した所謂秦銅器を取扱ひ、これに科學性を與へんとされたのが、本論文である。只秦銅器を考古學に於けるチイボロヂーの問題として取り上げるためには、いくつかの基礎的な仕事があるであらう。著者は、其の吟味を、今後も充分にされることと考へ、吾々の期待は大きい。聞く所によれば佛譯論文をも近く出されるといふ。吾々は梅原氏の事業が成功して、世界の東洋學者に貢獻せんことを望むものである。

## 梅原末治 漢三國六朝紀念鏡集錄 (406)

## 梗概

廣く東西に亘つて蒐集した紀年鏡の資料を集録整理した書冊である。時代を漢三國六朝の範圍に眼り、支那紀年鏡の銘文及記載事項を列舉してゐる。漢代に於ては 21 例、吳では 32 例、魏は 6 例、六朝のものは 15 例。補記に於て更に建安元年鏡・赤烏元年鏡それぞれ一面を加へる。附録には嘗つて考古學雜誌 20 卷 8 號に掲載した漢三國六朝紀年鏡一覽表を添へてゐる。(編者)

## 批評

銘辭の研究から出發した日本の古鏡研究は、其の基準を紀年鏡に置いて來た。這種古鏡研究の最高次的存在である梅原末治氏が、最近の豊富な知見に基いて整理された紀年鏡銘集録が本書である。本書は支那金石文の學に多大の貢獻をされてゐる。

次に今日重要な問題の一つとして資料の整理が叫ばれる。梅原氏の如き中堅學者に依つて這種の仕事の一つを成し上げられたことを喜ぶ。併せて本書と姉妹篇をなす完好な紀年鏡圖録の續刊を著者に期待するものである。

## 梅原末治 アルタイ地方に於ける考古學上の新發見 (423)

## 梗概

1930年露西亞博物館を訪ひ、未發表の資料に就き觀察調査した。許された範圍内に於て資料を報告し併せて考察を加へたものが本編である。1927年頁 Grjaznoff 氏は南アルタイ地方のシベに於て大きな割石からなる一積石古墳を發掘した。墓壙はアルタイ地方の古墳に通有な方形のプランを持つ。墓壙内部の南に偏在して二重装置の矩形の室があり棺を置く。室は全部丸太を半截した木材からなつてゐたが、凍結の爲遺存し、校倉式に近い構造の細部が見られる。室の天井も二重装置で更に上部を丸太の材を以つて八重に被覆してゐる。壙の北部の空所には全部丸太を詰め、其内に陪葬の馬 14 頭が容れられてゐた。棺は木室内の南壁に沿つて置かれ、大木を削り抜いた原始的形武で、棺内に成人男子及び子供の木乃伊があつた。室内の副葬品の大部分は盜掘の厄に遭つて失はれたが、壙の北側に埋められた馬の裝飾具は、著裝したまゝに發見された。次に 1929 年同じく南アルタイのバズリツクで Rudenko 教授が發見した一古墳もまた積石塚で、すべての構造はシベ古墳と同じであるが一層整つてゐる。棺が亦シベの其れと共通する。既に盜掘に遭ひ副葬品を缺くが室外に陪葬された 10 頭の馬は凍結して豊富な馬具を裝つた原狀の儘で存した。馬の裝具は鞍と面繫に於ける杏葉とが著しい。Grjaznoff 氏はシベ古墳を漢の盛時即ち紀元 1 世紀前後とし、Rudenko 教授はバズリツク古墳を紀元前 3 世紀とし G 氏も其の説に同じた。然し、バズリツク古墳の年代觀には直ちに從ふことは出來ない。バズリツク古墳の馬具に於てはスキタイ風の特徴が顯著であつた。シベの例も動物文はスキタイ風であつたが、漢代漆器の如き支那裝品を含み、又馬具の内には純支を那的圖樣も持つ。スキタイ風といふも純然たるものではなく地方的變化を示し、寧ろ一部學者のいふスキタイ・シベリア



風と見なすべきであらう。其點1924—25年北蒙古ノイン・ウラ山で發掘された古墳と似てゐる。シベは同じ事象の一層濃厚なノイン・ウラの遺蹟と共に漢の遺物を混有し漢文化の西漸を現す。他方墳構成の主體をなす木造の室が、其の架構の原則乃至墳墓との關係に於て、ノイン・ウラ山墳墓と共に、朝鮮樂浪古墳に共通する。これは樂浪の漢墓の系統觀に一の示唆を興へる。

批評

露西亞の考古學は日本の如く進んでゐるか否か疑問である。が或る意味で新興的且つ暗示的ともいへやう。親しく露西亞を訪ね正確に觀察調査された報告論文は資料の提供以外に、同國の研究狀態を傳へる文献として尊重に價する。提供された資料はシベリアに於ける漢及びスキタイの要素を探らうとするものに一の寄與をなす。

考古學界動向回顧

昭和六年度



### 縄文式時代關係

昨年度に於ける此の方面の研究は、依然として根本的には關東東北的な傾向の踏襲であつた。しかし、種々の方面で吾々は、新しい機運の曙光をも感じさせられた。

アグノーエル氏が大山史前學研究所の助力を得て、佛文日本石器時代研究を遺蹟を主體として記述し、日本の斯學に就て知ることの尠い多數外人に向つて發表したことは、最初に記して置くべきであらう。これは、中谷治宇二郎氏が日本縄文土器文化について若干の佛文論文を發表されつゝあるのと、併せ参照すべきものである。

大場磐雄氏は奥羽薄手式土器に關する一の考察を發表した(64)。其は氏の豊富な踏査の経験によつて、全日本的な上代文化の傾向から立論されてゐて、關東東北のみにとらはれた學者に反省の機會を與へる點で貢獻した。吾々にとつて部分部分の詳しい報告論文も必要であるが、其は全體への綜合を企圖して後の必要事である。部分的に、餘りにも部分的に、地につきすぎて、全體への注意を失つてゐるのが今日の一部に於ける縄文土器系文化の研究ではなからうか。

四五の人を除き、多くの學者は、縄文土器に於ける型式設定の濫發を憂ひてゐる。今日關東東北と信州のみに限つて數十に及ぶ型式の細別が行はれ、今後に於ても數多く設定されやうとする傾向が見える。斯様な型式の細別は數人の學者のみによつて試みられてゐる。細別派の四五人を除く多數の學者には、其等の細別は單なる符牒や暗號に近い感をあたへる。この傾向を今後に於ても踏襲するならば、かの有名な相對性理論の理解者よりも、更に一層數の尠ない理解者をもつであらう。吾々は地方的な無數の型式の細別よりも、共に先んじて「型式」なる概念を明にし、分類の問題の正しい取り上げ方を學者に望んで止まぬものである。

嘗ては一遺跡の部分的試堀乃至發掘の頻度が、アマチュアを考古學者に速成したこともあつた。けれども、今日漸く、文化層位の必然性と單なる發掘層位の偶然性とを峻別することが論じられ、層位の偶然を以つてしては解決し得られない幾多の問題に遭遇した。分類の問題、分布の問題が優秀な學者によつて再吟味されやうとしつつあるのは其の爲であらう。分布の問題については、赤堀英三氏が若干の石器を例にとつてされた論證(76, 78, 79)を最收獲として特記したい。分類に就ては八幡氏の注意の喚起(1)を多とする。



過去數年間杉山壽榮男氏は、其の得意とする土器の工藝的研究を以つて、學界の一部をリードされてきた。氏の學への大きい貢献として吾々は長く氏に感謝すべきものである。此の指導者たりし氏が今や原始工藝と考古學の區別を認識し、明日への飛躍を準備して居られると聞いて今後の氏に期待する所も又大きい。

以上に述べた此の方面の研究の状態は、其の窮局に於て、良き指導者の出現をまちつつあるものといへやう。只、最後に縄文式時代關係の優れた學者山内清男、中谷治宇二郎兩氏の文献發表の無かなつことは、一のさびしさであつたことを附記して置きたい。又、田澤金吾、大場磐男氏等の研究にも、今後まつべきものがあり、併せて此の方面の新興勢力たる大山史前研究所の活潑なる活動を冀ふものである。

### 彌生式時代關係

吾が彌生式時代文化の研究は、1930年を境として長足の進歩を見た。昨年度は其の進歩の連続である。

彌生式土器遺跡の報告の續出は、かつて青銅器、青銅器を模した石器に終始した傾向を抜け出でて、今や地に就かうとするもののあることを告げる。中山平次郎博士の福岡縣大宰府町を中心とする彌生式系統遺跡の地域的調査(89)、小林行雄氏の彌生式土器櫛目式紋を取扱つて北九州彌生式と彌生町式彌生式との中間に介在する彌生式土器に若干の地域的様式が存在を認めやうとされた如き(199)、森本六爾が平形銅劍の資料を整理して瀬戸内に平形銅劍地域を設定(140)したが如き共に正當な傾向への寄與である。

八幡一郎氏が、關東に於て石器を伴ふ彌生式遺跡の調査を初められ(107)、永倉松男、鏡山猛の兩氏が北九州に於て、新しい型式の甕棺と箱式棺と共存する彌生式土器の究明に一の實例を示されたこと(88)は、樋口清之氏が畿内に於て石器製造所遺蹟を對象として附近一帯の同代文化を省察せむと意企(98)せられつゝあるのと共に其れ其れ問題をもつ報告論文として歓迎する。併せて問題の最後の解決の今後にあることを告げ是等の問題提出者の今後の研究に、吾々は多大の期待をかけざるを得ない。

一方、この時代の遺物中、研究の歴史の舊い金屬器に就ては、資料の整理若しくは綜合の期に這入つた。梅原末治氏の筑前井原發見鏡片の復原は、資料整理の技術的方面へ貢献し(137)、

森本六爾は多鈕細文鏡を發見と研究との併行關係に基づき、一の學史的整理を志し(136)、或は文化傳播の型態を見點として銅銚銅劍及銅鐸等の青銅器を取扱ひ(133)、直良信夫氏が日本海々岸に於ける石器伴出の銅鏃を記述(145)された如き、共に綜合と整理への傾向をたどるものとも云へやう。

發見された物への興味を主體として報告されたものには、尾張發見の細形銅劍(142, 143)、信濃に於ける貸泉出土遺跡(149)、常陸に於ける有角石劍、變形鐵劍式石劍發見(132)の所報であらう。只最後者に就ては、遺跡並に伴出遺物の正確な調査を改めて望むものである。中山平次郎博士が、北九州に於て、石蓋土壙の確實な例を報告して、考古學的タームを又學界に一つ増加された貢献をも忘れてはならぬであらう。

### 祝部式時代關係

昨年度に於ける、此の方面の研究を、一言にして盡せば依然として物中心主義であつたと云へやう。

一つの顯はれたる事象は埴輪の研究であらう。後藤守一氏・相川龍雄氏は多くの文献を残された。この埴輪研究の機運は、數年前に於ける群馬縣の古墳發掘に端を發し、「考古學」の埴輪研究號、帝室博物館の埴輪展覽會を経て、昨年度の流行を見た譯である。この流行は埴輪に於ける珍しいもの數々を新に吾々に報じたのをとるべきである。ただ目新しく聞いたものは、濱田博士によつて創唱され(193)、島田貞彦氏によつて祖述された(197)甕棺と埴輪圓筒との關係についての一説であらう。其は一つの異色ある提唱として、多くの學者により論議せられたと聞く。

埴輪の流行を除いて、ここに二三の勞作を挙げやう。墳墓の外形を取扱つたものに淺田芳郎氏の方形墳に對する考察(152)がある。豫め方形墳に於ける新古の二式を認容して、方形墳の資料を検討しこれに解釋を施したものである。方法論的にはともかくも眞摯な研究だけに、多とすべきものである。古墳の調査報告としては梅原末治氏の京都府桑飼村古墳の報告(163)、徳富武雄、中根君郎氏の東京府下嶺の横穴の調査(184)等が注意に上つた。前者は未完であるが、墳の内部主體埋藏部を繞つて方形に配列した埴輪を記してゐる點よりも、墳墓の断面圖の表現に新しい手法を用ひたことによつて記憶さる可きものであり、後者は數少く且つ粗い關東横穴の研究に、新に基礎的な資料を提供したことで忘れ難いものである。



遺物を取扱つたものでは藤田亮策氏の日本内地及び朝鮮出土の耳飾に関する論考(224)を第一に數ふべきである。東西古今に亘る著者の知識の該博性は遺憾なく發揮せられてゐる。吾々は嘗つて濱田耕作博士が耳飾を出す古墳の性質に就て與へられた貴重な暗示(京大報告)を想起し、博士の暗示の實證されることを喜ぶものである。

此の年、故高橋健自氏の歴史的名著「鏡と劍と玉」とが再版(225)され、一時十圓近い賣價を呼んでゐた此の書が、比較的廉價に入手することが出来るやうになつた。これは文献の歴史的回顧を容易にした點で、貢獻した。

最後に繰返して言はう。古墳を中心とした此の時代の研究は未だ物を離れず、且つ其故に地についてゐない。古墳の研究はいかに進むべきであらうか。吾々は、この時代の専門家の三思を乞ふと共に新進の學者の擡頭を祈るものである。

#### 日本内地諸問題關係

新しく舊石器時代の問題が起つた。提唱者は直良信夫氏である。氏は其の住所に近い播磨の一海岸で其を目撃研究して結果を人類學雜誌に發表(257)された。是非の聲が所々に起つた。日本に於て舊石器の遺跡の存在は不可能でない。又瀬戸内海沿岸地帯には存在が論じられても條件に於て不都合でない所がある。しかし、直良氏舉示のものが直ちに舊石器時代のものであるか否かは然るべき人により、將來の解決を俟たねばならぬ。石器に就ては鳥居博士等は其を原石器の問題としてとり上げた。吾々は只この舊石器問題について注意を喚起された直良氏の努力を多として置かう。

考古學に於ける航空寫眞の利用が新しく叫れた。雜誌「考古學」は第2卷第2號を擧げて森本六爾の「飛行機と考古學」を掲げた。是は新しい方法がなした多くの成功の例を擧げて、日本に於ける「空からの考古學」の實現すべきを強調した。日本の畑に燕麥を移植せよの暴論でなかつたために、青年學徒に受け容れられ、幸ひ一の好い收穫が得られた。昨年5月武藏高麗村の敷石遺跡發掘前に飛行機を飛して地下に匿れた遺跡を、クローズ・マークにより、寫眞面に撮し出したのである。遺蹟が桑・麥の畑に跨つてゐたが、桑畑の方が麥畑に比して良く現れたのは、注意すべき事實であつた。

雜誌「中央公論」が一昨年「社會科學の頁」を新設し、昨年10月まで、社會科學關係の論文抄出を掲げた。考古學も文化人類學の項中に抄録された。11月からは雜誌「思想」に「社會新

潮」の名で續けられた。「中央公論」といひ「思想」といひ共に、日本の大多數の知識階級を讀者層にもつ雑誌である。「考古學」が社會科學の一として其の中に抄録されることは學の今日の研究状態を正當に紹介主張する好機會である。擔當者の勞を多とすると共に今後も抄録すべき論文の選擇よろしきを得て、その高識を示されむことを望むものである。此の年、經濟史家及び社會史家の考古學の資料を利用して、其の理論を主張するものがあつた。渡邊義通氏の業績(260)の如き勞作の一つに數へ得るであらう。又年少の士にして、最近の社會科學への理解を示さうとする例(153)も生じた。マルクスは吾が考古學にも四角四面な煉瓦の破片をまき散らしたのである。

#### 滿洲支那其他關係

朝鮮に於ける古蹟調査事業の進捗は、年と共に加へられて來た。野守健、小泉顯夫兩氏の達城面古墳報告書(379)、梅原末治氏の慶州金鈴塚飾履塚發掘報告圖版(380)は、其の確實性を表すといへよう。

しかし、昨年度に於ける注目すべき現象は、滿洲及支那方面に關する文献の著しい増加である。其はかの滿洲事變とは直接にはアンデパンダンであるとはいへ、其の事變を見たのと年を同じうしての現象であることは吾々の一考を要求する。日本遠古の文化と直接連鎖の一環をなす支那及滿洲の研究は今後も日本學者の歛を入るべき豐饒にして空漠たる分野である。濱田耕作、鳥居龍藏、原田淑人、梅原末治氏の先覺者を初め斯學の新進諸家が轡を並べて、豪華なる研究の成果をあげられつつあるのは、恰も日本國家總動員の下に滿洲問題の解決を叫びつつあるに似てゐる。

現れた文献だけに就て言へば、滿洲及び支那を取扱ふ學者に二つの型がある。其の一つは珍奇な金屬器に資料を求めて、東西に亘る廣い地域の文化交渉を論じやうとするもの、他は文化の基調となる事象の研究を最初に試み、其の上につままれた新來の要素を摘出しようとするものである。前者は歐州の東洋學者と研究の軌を一にするもので、「遺物」から這入つて行く研究とすれば、後者は「遺跡」から這入つて行く研究とも言へよう。其の孰がより科學的であるか、今吾々は早急に言ふことを好まない。

前者の研究に於ては、梅原氏の卓絶した若干の業績(400—408)がある。中でも支那古代の銅利器に關するもの(400)及び所謂秦銅器に關する(403)論文が、氏の研究の著しい進展性を示



す力作といへよう。支那の銅利器を對象とする研究は、支那考古學に關與する學者の流行たらしんとするもの、床上に珍奇の光を放つ所謂三代の器より離れて、日常の具たる利器へ研究の中心が移行したことは喜ぶべきである。彼のヤンセー博士の銅劍に關する研究を嚮に迎へ、今又梅原氏の斧と戈に關する考察を聽くことは、吾々の望むところが滿されつつあると言へよう。巴里の商人ワニヤックが東洋美術の博物館等と結んで賣り出した商品「秦銅器」は、1923年頃から1930年頃まで、歐洲の東洋學界を風靡した流行であつた。しかし、流行が他の新しいものと入れ代る様になつて、秦銅器は前漢初期の一様式として、整理されるやうになつた。梅原氏は「秦銅器」流行當時留學され、其の觀賞の流行を目撃して廣く資料を蒐し、其の考察に一の科學性を與へやうとされたのが此の論文であり、現下本邦學界に流行しつつある秦銅器考察の基準をなすものである。

前述した他の一つの型として、文化の基調をなす石器時代遺蹟より研究の歩を進めてゐるものに、エ・リヤン師、小牧實繁、江上波夫、水野清一、駒井和愛諸氏の業績(394—397)があつた。より科學的な研究方法として、今後の解明について、期待する所が大きい。よしや今日までの資料の報告が、華かでないとしても、其の勞苦の上に咲く華こそ、最終的にして且つ決定的なものとならう。

支那に就て、一昨年末から騒れた問題として支那周口店に於ける最古人類の遺骨の例を加ふべきであらう。敏感な本邦學者はこれに關する報導を怠らなかつた(321—393)。其は恰も日本に於て舊石器時代遺蹟存在の有無が騒がれた年に於てである點に一興がある。

序を以つて、シベリアに於ける研究を言はう。ここにはロシア博物館員の活動がある。其は地域的調査を以つて特色とする。其の方面に注意し且つ嘗てはロシアに遊れた梅原末治氏が南アルタイ地方の古墳發掘の實際を其の豊富な知識によつて正確に紹介(423)されたことは、吾々の等しく感謝する所である。

### 發掘及發見關係

勞苦ある發掘及幸福な發見尊重の慣例にならつて、昨年度に於ける主要な發掘を一瞥しよう。繩文關係に於ては、此の方面の新しい勢力たる大山史前研究所が關東に於てなされつつある發掘事業の貢獻は改めていふまでもない。最も云ひはやされたものに、3月發掘の行はれた武藏

國南多摩郡川口村檜原遺蹟がある。後藤守一氏主としてこれに當り繩文土器及び石器を發掘し、柱穴のある住居址を検出した。早大學生諸氏によつてなされた武藏國高麗村の發掘は別項に於て一言した。近畿では大和國吉野郡中莊村宮瀧に於て末長雅雄氏が一昨年發掘を行ひ、同地方では珍しい多量の繩文土器を彌生式土器と共に検出した。その好結果によつて、昨年も第二期の發掘をなし、又同様の成績を得られた。其の詳報は昭和8年春期に於て發表を見るであらう。肥後國菊池郡合志原に於ては坂本經繞氏の發掘があつた。

彌生式關係に就ては、北九州福岡縣遠賀郡水巻村立屋敷の遺蹟が晩秋の頃福岡地方で問題となり、越えて昭和7年春、中山平次郎博士によつて問題を中央に移された。

祝部式時代關係に就ては昨秋後藤守一氏等の參加した遠江國磐田郡御厨村大字新貝松林古墳の發掘を特記すべきであらう。古墳は前方後圓墳で、當初は葦石を有し、埴輪を繞らし隕をもつてゐたらしい。堅穴式石室内よりは鏡、琴柱形石製品、巴形銅器其他多くの遺物を出した。

時代は更に落ちるが、10月羽前國飽海郡本楯村大字城輪に於て正方形に近いプランをもつ柵址の大發掘があつた。調査者は一昨年拂田の柵址を調査して成績を挙げられた經驗のある上田三平氏である。其の正報告は昭和7年度に刊行されるといふ。

朝鮮に於ては、昨秋平安南道孟山郡より一個の蠟石製鎔范が發見され梅原末治氏の注意に上つた。これは特殊な古鏡として學界に知られた多鈕細文鏡の鎔范である點に於て記憶さるべきものである。

南滿洲の旅順に近い牧城驛沙崗屯で壁畫古墳が道路工事の際、森修内藤寛氏によつて學術的發掘が行はれた。夏のことである。發掘を觀られた濱田耕作博士の文献が(387)世に出てゐる。

### 研究所及學會關係

濱田博士を主腦とする京都帝國大學考古學教室は、同教室研究報告の12冊を讃岐の積石古墳の記載にあて、昨春濱田、梅原、島田諸氏が調査に參加された。同報告は昭和7年度に公刊される豫定といはれる。吾々は光輝ある歴史的報告書の續刊によつて、幾多の暗示と刺激との與へられむことを期待する。

東京及び京都にそれぞれ研究所を持つ東方文化學院は、其の研究所としての組織を整へ、共に年内に2冊の報告書を刊行した。日本學者の支那考古學への寄與は、年と共に増大するであ



らう。

東京帝國大學理學部人類學教室を背景とする東京人類學會は「人類學雜誌」を12冊(519—530號)刊行し、外に人類學の論文8冊を附録として會員に頒つた。同雜誌が一昨年頃人骨の研究に偏したため、今年は努めて文化人類學關係の論策を加味された。

東京帝室博物館歴史課を中心とする考古學會も「考古學雜誌」(21卷)を月刊した。5月大會を開催し、第二日に東京市赤坂區福吉町黒田侯爵家の展觀を行つた。有名な「漢委奴國王」金印が公開されて、一部學者の偽作説を解消したのは嬉しい舉であつた。考古學雜誌に掲げられた内容は板碑、塔の如きものの増加して行く傾向が眼につく。

大山史前學研究所内設置の史前學會からは史前學雜誌が刊行され、第3卷を4冊(5號)刊行した。2.3號は大山公爵の勞作「マダレモーチアン文化概説」を以つて一冊を當ててゐる。大山公の文献が此の雜誌の異彩として、毎號公爵の執筆こそ吾々の歓迎する所である。第6號は、關東貝塚の編年的研究として昭和7年刊行すべき約束をされた。

東京考古學會は「考古學」第2卷を6號刊行した。2號を「飛行機と考古學」特輯號、4號を「埴輪の新研究」號と題した。この雜誌は創刊以來の問題たる彌生式文化を主として取扱つた。昭和7年に入り月刊となつた爲、隔月刊は第2卷を以つて終る。

次に地方の考古學會を見よう。

信濃考古學會は、神津猛、八幡一郎兩氏の協力の下に、兩角守一、藤森榮一氏等の執筆助力を得て、雜誌「信濃考古學會誌」を刊行し、地方雜誌としては稀に見る洗練さを示したが、第2年第5.6合冊號を1月に刊行したまま休刊した。惜しいことである。秋田考古會は秋田考古會々誌を昨年12冊に至つて一冊刊行し、近時の大發掘たる柵研究を中心とした。編輯及執筆に於ける深澤多市、武藤一郎氏等の努力が見られる。大和から島本一氏を中心とする「考古叢書」が10月大和文化研究會の名の下に生れた。これは昭和7年に入り、雜誌名を「大和考古學」、會名を「大和上代文化研究會」と改め華やかな發展を示すことになつた。

考古學の論文報告を掲げる中央及び地方の史學の雜誌に就て若干の記述を要するものもあるが、省いて置かう。

## 附 録

本輯資料蒐集雜誌一覽表  
考古學主要雜誌解題  
文献追加及批評書込欄



本輯資料採集雜誌一覽表

ア 行

- 愛知教育 (愛知教育) 名古屋市愛知縣廳內 愛知教育會
- 秋田考古會會誌 (秋田會誌) 秋田市縣立秋田圖書館內 秋田考古會
- 安藝國 (安藝國) 廣島市新川場町 48 文屋書店 安藝郷土研究会
- 蝦夷往來 (蝦夷往來) 札幌市南大通西 416 尙古堂書店

カ 行

- 考古學 (考古學) 東京市赤坂京青山南町 6 丁目 101 東京考古學會
- 考古學雜誌 (考古學雜) 東京市本郷區龍岡町 32 考古學會
- 考古雜筆 (考古雜筆) 奈良縣高市郡八木町新道 島本一
- 考古叢書 (考古叢書) 奈良縣高市郡八木町新道 大和文化研究会
- 吉備考古 (吉備考古) 岡山市上石井島屋町水原方 吉備考古會
- 郷土研究 (郷土研究) 北海道北見國網走町 北見郷土研究会
- 科學畫報 (科學畫報) 東京市神田區錦町 1 丁目 19 新光社
- 毛野 (毛野) 群馬縣山田郡大間々町 毛野研究会
- 國華 (國華) 東京市麻布區市兵衛町 2 丁目 1 國華社

サ 行

- 埼玉史壇 (埼玉史壇) 埼玉縣浦和町縣立埼玉圖書館內 埼玉郷土會
- 史前學雜誌 (史前雜誌) 東京市青山區田 9 大山邸內 史前學會
- 史學 (史學) 東京市芝區三田慶應義塾大學文學部研究室內 三田史學會
- 史學雜誌 (史學雜誌) 東京市神田區通神保町 9 富山房內 史學會
- 史觀 (史觀) 東京市牛込區早稻田 早稻田大學史學科
- 史苑 (史苑) 東京市外池袋 立教大學史學會
- 史淵 (史淵) 九州帝國大學法文學部史學研究室 九大史學會
- 史潮 (史潮) 東京市小石川區大塚窪町文理科學大學史學研究室 大塚史學會
- 史林 (史林) 京都帝國大學文學部內 史學研究会



附 録

史蹟名勝 (史蹟名勝) 東京市文部省宗教局保存課内 史蹟名勝天然紀念物保存協會  
 天然紀念物 (史蹟名勝) 東京市文部省宗教局保存課内 史蹟名勝天然紀念物保存協會  
 史迹と美術 (史と美) 京都市烏丸通二條南入 スズカケ出版部 史迹・美術同致會  
 思想 (思想) 東京市神田區一ツ橋通り3 岩波書店  
 信濃考古學會誌 (信濃會誌) 上田市鷹匠町神津猛方 信濃考古學會  
 上代文化 (上代文化) 東京市外濠谷町 國學院大學上代文化研究會  
 上毛及上毛人 (上毛) 前橋市南曲輪町19 上毛郷土史研究會  
 神道學雜誌 (道學雜誌) 東京市神田區錦町3丁目18 神道學會  
 人類學雜誌 (人類學雜誌) 東京市神田區北甲賀町4 國書院 東京人類學會  
 青丘學叢 (青丘學叢) 朝鮮京城府清雲洞94 青丘學會

タ 行

旅と傳説 (旅と傳説) 東京市神田區西今川町 三元社  
 中央公論 (中央公論) 東京市丸ノ内ビルヂング588區 中央公論社  
 筑紫史壇 (筑紫史壇) 福岡市本庄町2丁目271 筑紫史談會  
 都久志 (都久志) 福岡市本町27都久志刊行會 橋詰武生  
 東洋學報 (東洋學報) 東京市麴町區内幸町2丁目2 東洋協會學術調查部  
 東洋美術 (東洋美術) 奈良市帝室博物館横 飛鳥園  
 遠江郷土會誌 (遠江會誌) 静岡縣小笠郡西南郷村神代地 遠江郷土研究會

ナ 行

寧樂 (寧樂) 奈良市東大寺龍松院内 寧樂發行所  
 なら (なら) 奈良市西紀寺町東口 高田十郎  
 日本研究 (日本研究) 東京府下野方町上沼袋161 西村方 日本學協會

ハ 行

播磨文化資料 (播磨資料) 姫路市外谷外村庄淺田芳郎方 播磨文化研究會  
 備後史壇 (備後史壇) 福山市東堀端町乙196,6 備後郷土史會  
 福岡 (福岡) 福岡市平尾1421東西文化社 有吉憲彰  
 防長史學 (防長史學) 山口市縣立山口圖書館郷土志料室 防長史談會

マ 行

附 録

武藏野 (武藏野) 東京市外世田ヶ谷町世田ヶ谷久保1270 武藏野會

ヤ 行

山梨教育 (山梨教育) 甲府市橋町18 山梨縣教育會

ラ 行

歴史地理 (歴史地理) 東京市小石川區東青柳町11 日本歴史地理學會  
 歴史と地理 (歴と地) 京都市上京區堀川丸太町西入 星野書店



## 考古學主要雑誌解題

## 人類學雜誌 (人類學雜)

東京人類學會の機關雜誌である。月刊。

東京人類學會の創立は明治17年10月、當時會名を「じんるいがくのともし」と名づけ、後幾もなく「人類學會」と變更。明治19年2月人類學會の機關雜誌として「人類學會報告」を月刊。明治19年6月、5號に至つて會名を「東京人類學會」、雜誌名を「東京人類學會報告」と改め、之と同時に、第1卷なる卷數をも加へ、且つ英名を添へ The Bulletin of the Tokyo Anthropological Society と稱し、英文コンテンツをも加ふ。明治20年8月、第2卷通編18號以來雜誌名を「東京人類學會雜誌」と呼ぶ。明治44年8月、第27卷通編301號より、通編を廢し、雜誌名を「人類學雜誌」と改稱し、今日に及ぶ。昭和7年6月、第47卷6號を發刊す。本邦人類學關係雜誌の嚆矢、明後昭和9年を以つて齡50を迎ふ。近時人骨に關する論文多きも、石器時代の研究報告少からず。

## 考古學雜誌 (考古學雜)

考古學會の機關雜誌である。月刊。

考古學會は明治28年4月東京に於て發會式を擧ぐ。明治29年12月機關雜誌「考古學會雜誌」を月刊す。明治33年2月、第3編4號(通編28號)を出し、「考古」と改題す。「考古」は明治33年4月に第1編1號を刊行し、同年11月7號を出し後更に「考古界」と改名。「考古界」は明治34年6月第1編1號を發行し、明治43年3月8編12號(通編96號)を出して又「考古學雜誌」と改めて今日に及ぶ。「考古學雜誌」は明治43年9月に第1卷1號を發行し、昭和7年6月、第22卷6號を出す。各卷12冊から成る。但し14卷のみは15冊。考古學會は東京人類學會より派生し、遅ること10年、考古學關係學會としては歴史の古きこと正に第二位。東京帝室博物館歴史課とは關係深く、近時、古墳關係及び歴史時代關係の記事多し。

## 史前學雜誌 (史前雜誌)

大山史前學研究所に併置された史前學會の機關雜誌である。隔月刊。

大正15年10月、大山柏公爵を中心として同公邸内に史前研究會創設され、後組織の完成を俟ち、大山史前研究所と改む。昭和4年3月「史前學雜誌」を隔月刊す。雜誌發行所として「史前學會」の名を設け、大山史前研究所内に併置す。従つて兩者は異名同體たりとも云ふべし。昭和7年7月、第4卷2號を刊行す。毎號、關東及東北の石器時代關係の論文報告多し。又、大山公の歐洲舊石器時代に關する勞作を掲げ、他雜誌に比して異色あり。最近、雜誌の刊行不定期に近し。

## 考古學 (考古學)

東京考古學會の機關雜誌である。月刊。

昭和4年12月東京考古學會の創設されるや、機關雜誌「考古學」を5年1月より隔月刊す。東京考古學會は雜誌を以つて共同の研究所とする研究團體。昭和7年4月、第3卷の刊行に當り、月刊を實施す。年10冊刊行、7・8兩月は夏期の休暇に當て、別に「考古學年報」を刊行す。先史考古學方面の論文報告の掲載につとめ、近時彌生式文化の闡明に努力す。



文献追加書入欄



南大書院圖書館

批 評 欄

---



## 東京考古學會會則

第一條 本會を東京考古學會と命名す。

第二條 本會は考古學に關する智識の普及並に研究者相互の交詢聯絡を目的とす。

第三條 本會はその目的を達成するために左の事業を行ふ。

イ、月刊雜誌『考古學』を年十冊發行し、『考古學年報』一冊を刊行す。

尙別に『東京考古學會學報』を刊行することあるべし。

ロ、隔月一回談話會を開き、年一回總會を催す。

ハ、隨時研究旅行を行ふ。

第四條 本會の會員は本會の趣旨に賛し會費（半年分三圓 一年分六圓）を前納するものとす。特別號發行の際の超過會費は別に之を定む。

第五條 特に本會の事業の發展を計るために、本會會員にして會費の倍額を收むるものを特別會員とし、金百圓以上を一時に收むるものを終身會員とす。

第六條 本會員は雜誌『考古學』及び『考古學年報』の配布を受け、研究會並に研究旅行に出席參加し、本會發行の圖書類に關しては便宜を受くるものとす。

第七條 本會は會務を遂行するために會長一名（當分之を缺く）、委員長一名、委員若干名を置く。委員は本會の編輯庶務會計の事務を擔當し、委員長は委員より選ぶものとす。

第八條 會員との連絡事務を計るために各地會員中より若干の委員を推舉し、または各地に若干の支部を設置することあるべし。

昭和七年九月四日印刷

昭和七年九月四日發行

編輯者  
發行所

定價一冊 壹圓貳拾錢

送料一冊 六錢

森 本 六 爾  
東京市赤坂區青山南町六丁目一〇一

印刷者

福 井 安 久 太  
東京市芝區新橋區島森口

發行所 東京考古學會

東京市赤坂區青山南町六丁目一〇一 振替東京三八四七二番

發賣所 岡 書 院

東京市神田區駿河臺北甲賀町四 振替東京六七六一九番



45



14.5

307

14. 5-307



1200501216283

終